写真撮影後実測作業を行う。

7月11日（曇）　土坑の調査は数が多く、それも意外と深く、湧水で思いのほか困難である。第22号住居址の調査を開始するも深く本日完掘し、図面をとった後第23・33号住居址の調査にかかる。第28号住居址完掘する。

7月12日（曇）　昨夜の雨で朝のうち調査地がべたつき土砂運搬が困難であった。溝址にかかる土坑を実測し、溝址16・21～25の調査開始する。土器洗浄をする。

7月13日（晴）　昨日の溝址及び本日は溝址20の検出を進め、B区東側のピット・土坑の調査をする。この間掘り上がった所から実測をする。土器洗浄をする。

7月14日（晴）　午前中ですべての精査が終り、実測作業に全力を上げる。全体写真撮影をする。調査が終った人から土器洗浄作業にかかる。本日で調査を終了する。

7月15日（曇）　昨日やり残した遺構実測をし、機器材の撤収をする。

9月21日～29日　出土遺物の区別け作業を行い、一部復元に入る。

1～3月　報告書作成作業を行う。

3　調査会・調査団・参加者一覧

調査会・事務局の組織は清野小学校プール地点と同じであるので、そちらを参照されたい。

(1)　調査団

調査団長　森嶋　稔（日本考古学協会々員・上山田小教諭）
〃 主任　矢口　忠良（　〃　・長野市教委主事）
調 査 員　高原　英男（長野県考古学会々員・長野市消防局）
〃　原田　勝美（　〃　・長野市役所）
〃　小柳　義男（　〃　・松代小教諭）
〃　百瀬　久雄（　〃　・信大学生）
〃　馬場　長光（　〃　・　〃　）
〃（整理）　小林秀行・竹内稔・石上周蔵・直井雅尚・赤羽史子・田中正治郎（以上長野県考古学会々員・信大学生）・青木和明・奈須野由美（同・明大学生）
青木一男（同・国学院大学生）
特別調査員　西沢寿晃（日本考古学協会々員・信大医学部技官）

(2)　参加者一覧

塚田幸子・上原政子・真島こみじ・上原与子・宮本民子・西村澄子・宮沢美智子・吉沢きよ江・中沢尚江・近藤なつ子・和田勝登・林英子・真島朝子・上原礼智・島田澄子・渡辺二郎・若林宏江・柳沢マツ・丸山やす子・大島ハマ子・池田信子・小林けさい・吉沢菊雄・久保喜貞・小林尚一・上原孝親・上原敏彦・玉井節子・宮沢広・西村廣子・峯村益喜・真島嶋司・高野広・吉岡勲・山崎忠良・山崎善四郎・上原斉・久保茂幸・小林要・吉岡万夫・宮本敏雄・小林貞夫・山口英子・小林一郎・大沢喬・駒村陽一郎・直江袈裟夫・山崎孝子・青木丈元・上原敏

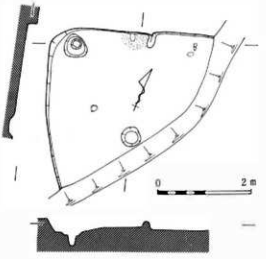
男・青木茂・中沢芳昭・久保三保子・林信一・上原サキ子・雨宮朋栄・原田邦男・伊熊ヤスォ・倉石 6子・荒川則子・北沢周子・窪田幸衛・上原元・上野洋子・大竹弘子・窪田昌子・松本美智子・原田とし子・百瀬信子・滝沢佳忠・丸山三七生・田中康一・原田和衛・中沢順子・安藤誠・小林武子・真島幸雄・青木省吾・久保政子・大島凱三・酒井章・佐藤義昭・上原忠政・吉岡たき子・宮崎徳太郎・久保良治・佐藤美恵子・松代昭春・唐木保典・細井敏行・琴川正則・久保充正・塚田久子・宮本建一・郷原建蔵・（区長郷原建蔵）　（事務局）

第2節　住居址

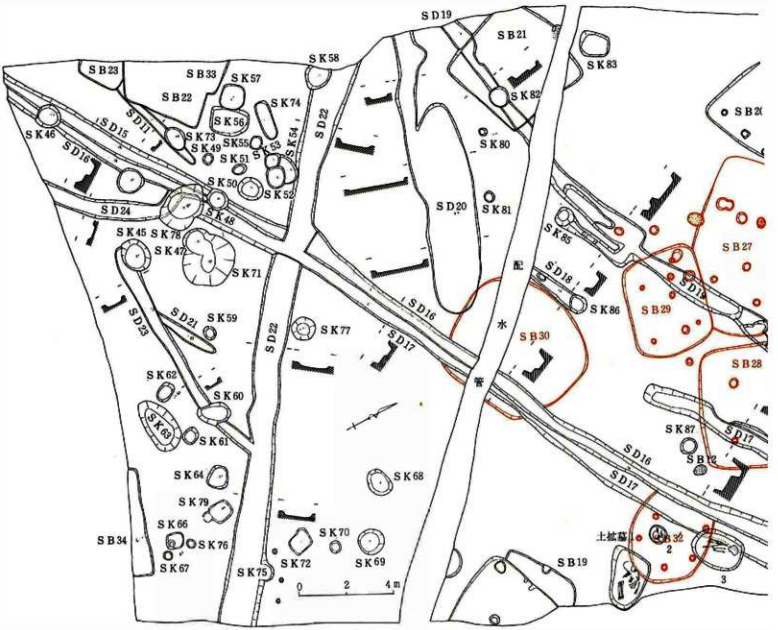
今回の調査で17軒確認し、全体を知り得るものは第20・21・27・28・30・31号住居址のみである。他は柱穴及び焼土をもって住居址としたものもあるし、調査地外へかかるものである。このうち弥生時代のものは8軒あり、第30号住居址を南端とし、調査地中央付近より清野小学校プールよりに展開し、これにたいし平安時代のものは重複しながら散在する傾向にある。掘り込み土層及び覆土は前回の調査と同様であるが、第30号住居址の南東隅付近より南・調査地南東部は鉄分を含んだ溶脱層になり堅い。図示したレベル高は校標より2m下のものを使用した（第77図）。

1　第18号住居址（第77・79図、第36・45図版）

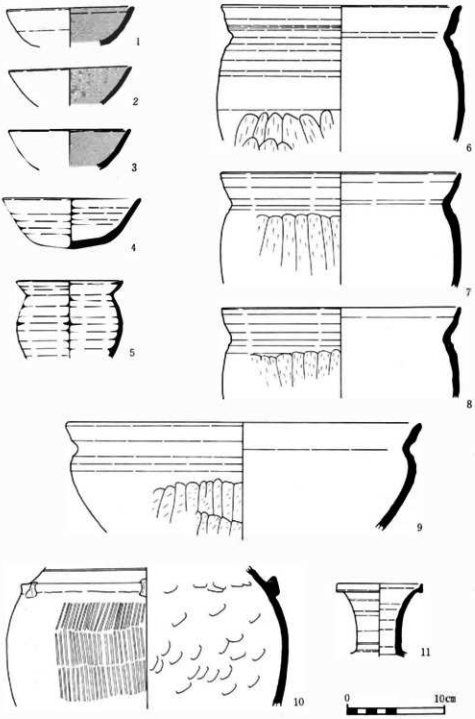
遺構　調査地の東側中央に位置し、第19号住居址を切る。遺構東半は調査区域外にかかるためプランの規模は不明であるが、方形を呈するものと思われる。主軸方向はN－21°－Wになる。壁高はカマド付近で21cm・西側壁で20cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。床面は平坦であるが中央部のレベルがやや低い。2個のピットが検出され、北西隅のピットはその位置から柱穴とも考えられるが、全体を検出していないので断定できない。カマドは北壁中央付近に設けられていると推定され、調査時では右手の袖部とその左35cmの位置に支石が残存し、その周辺から焼土が認められた。粘土製両袖形のものと思われる。遺物は多く、そのほとんどがカマド付近の覆土を中心とした位置から出土した。



第77図　第18号住居址実測図


SD19
SB21
SK83
SK58
SB23
SB33
SK57
SB22
SK74
SK56
SK82
SK46
SD15
SD11
SK73
SK49
SK55
SK54
SD22
SK80
SD16
SK51
SK50
SK52
SD24
SK48
SD20
SK81
SK45
SK76
SK47
SK71
SK85
SB27
SD18
SD21
SK59
SK77
SD16
SD17
SK86
SB29
SD23
SD22
配
水
管
SB30
SB28
SK62
SK60
SK69
SK61
SK87
SD17
SD16
SB12
SK64
SK68
SD17
SK79
SK66
SK76
SK70
SB34
SK67
SK72
SK69
SK75
SB19
土拡墓
SB32
2
3
0
2
4m

第78図 遺 構 分 布 図



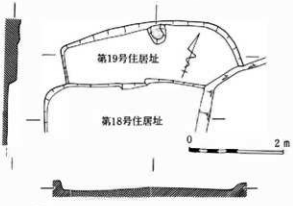
第79図　第18号住居址出土土器

遺物　器種に土師器坏（1～3）・甕（5～8）・浅鉢（9）形土器及び須恵器坏（4）四耳壺（10）・長頸瓶（11）形土器等があるが、前者は後者を獣において凌駕する。1～3は内面黒色処理され、4の底部には糸切り痕を残し、5は小形の甕形土器で、これらはいずれも水引き技法によりつくり出されている。6～8は大形の甕形土器で、最大径が口縁部にあるもの（7～8）とその部と近い数値で体部上半にあるもの（6）があり、口縁部が頸部からくの字形に外開した後鈍い稜を呈しながら更に立ち上がり、肩部がいくぶん張るという器形的特色を有し、整形においては、ロクロヨコナデ後右回りのタテヘラケズリが施されるという特色を有する。9も大形の甕形土器と体部のあり方を除き、器形及び整形手法は近似する。10は肩部にタガ状の隆帯をめぐらし、その上に小粘土塊を4個添付することに特色がある壺形土器で、検出したものは肩部から体部下半までで全形を知り得ない。外部には叩き目が見られ、内面は叩き台を用いヘラ先でかき取ったような痕跡を残す。11は長頸瓶の口縁部付近の破片で、全面ロクロ整形痕を残す。

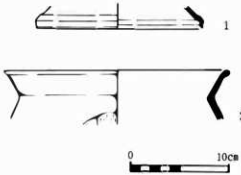
2　第19号住居址（第80・81図）

遺構　第18号住居址によって南側の大半を切られ一部区域外にかかる。プランは不整の方形を呈すると思われる。主軸方向はN－32°－Wを指し、東西方向の規模は3.70mである。壁は直に近く北東部で13cm、カマド付近で6cm、南西壁で20cmを測り、床面は平坦ながらやや西に傾く。柱穴は検出できなかった。北西壁面の焼土の張り出しがカマド部であると推定され、中央よりやや東方に位置する。焼土の張り出しは主軸・巾ともに40cmを測る。

遺物　出土量は少なく、すべて覆土からの出土である。図示したものは天井部が丸味を有し、口縁部が内屈し嘴状になる須恵器蓋形土器と第18号住居址出土の大形甕形土器と口縁端部が外反する点を除けば器形・整形手法がほぼ同様の土師器甕形土器の2点である。



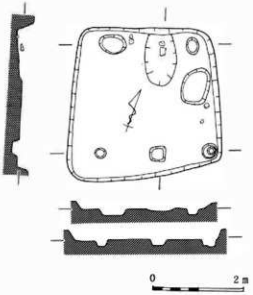
第80図　第19号住居址実測図



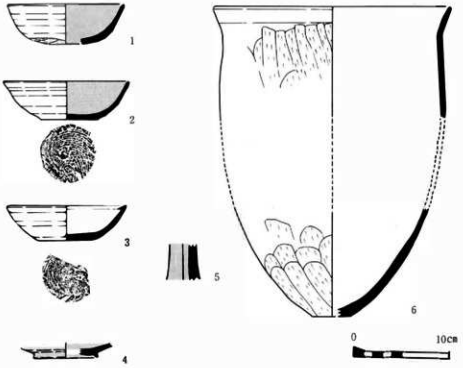
第81図　第19号住居址出土土器

3　第20号住居址（第82・83図、第36図版）

遺構　調査地北西隅に位置し、西側において第24・27号住居址と隣接する。主軸方向をN－19°－Wに取る不整方形プランである。主軸の長さは3.25m、南北壁の長さはそれぞれ3.30m・2.86mと、南側面の方が広くなっている。主柱穴は4個方形配列になるが、南壁柱穴間に1個の補助穴を有する。深さは各柱穴とも15cm前後の数値になる。ちなみに南北方向柱穴間2.40m・北側東西方向柱穴間1.28m・南側東西方向主柱穴間2.42mを測る。壁は各壁ともいくぶん傾斜を有し、壁高を東・西・南・北壁で各々11・21・23・20cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマドは北壁に構築されてい



第82図　第20号住居址実測図



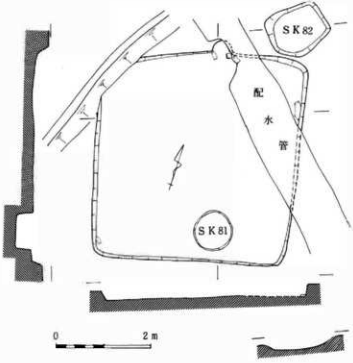
第83図　第20号住居址出土土器

たと思われ、調査では主軸方向へ1.15ｍ・巾70cm・深さ約７cmの楕円形舟底状のピットが確認され、内に支石に使用したであろう角礫及び焼土が認められた。東壁中央下に長軸80cm・短軸60cm・深さ20cmの不整楕円形のピットがあり、貯蔵穴と考えられる。

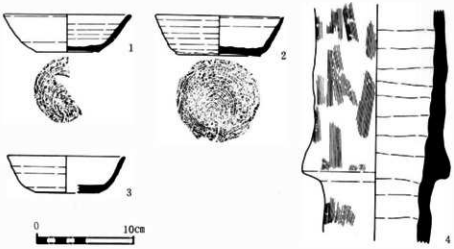
遺物　出土量は少ないが、甕形土器はカマドより、他はその付近の床面から出土している。３の須恵器を除いて他は土師器である。坏形土器は水引き技法により成形され、底部に糸切り痕を残す。１には底部外縁にヘラケズリが施され、１・２は内面研磨され黒色処理される。４は内外面とも黒色を呈し、底部がていねいにヘラケズリされ、外縁に断面三角形の低い高台が付される。５は筒形で、外面はタテミガキが施され黒色処理され、中央に１孔がある。高坏形土器脚部あるいは注口とも考えられる。６はカマドからの出土で体部中央付近が欠損する。口縁部はゆるく立ち上がり端部に最大径がある。体部が丸味をもち、小さな底部に集約される砲弾形の器形になる。口縁部付近はロクロ成形痕を、頸部より下方は右回りに上から下へ数回にわたるタテヘラケズリ痕を残す。

４　第21号住居址（第84・85図、第37・45図版）

遺構　調査地西縁中央部に位置し、北西隅が区域外にかかる。溝址19・土坑77によって切られ、配水管に一部覆われる。北側には土拡78が存在する。プランは不整方形で、主軸4.40ｍ・東西軸4.30ｍの規模を持ち、主軸方向Ｎ－13°－Ｗを指す。壁は直に近く、高さは南で21cmを測る他は18cmである。床面状態は良好でカマド付近は若干凹むが、全体に平坦である。柱穴は確認できなかった。北壁中央やや東寄りには、壁外へ張り出すカマドが存在する。袖部は明瞭でないが、袖石に使われたと思われる角礫があり、内に焼土及び形象埴輪の一部であろう円筒形の土製品が残存する。袖部の補強に用いられたのであ



第84図　第21号住居址及び土坑81・82実測図



第85図　第21号住居址出土遺物

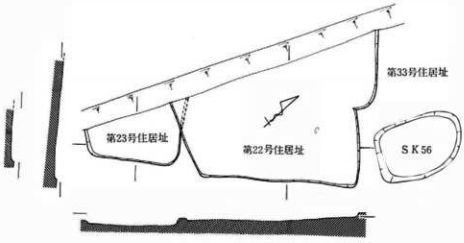
ろうか、注目される事例である。

遺物　図示した遺物は須恵器坏形土器は床面に接して、埴輪であろう円筒形土製品がカマドから出土した。坏形土器は水引き技法を用いた成形で、体部が直線的になり、1・2は口縁部が外反する。円筒形土製品は刷毛整形が全面に施され、断面三角形のタガが付され上部と段を構成する。内面はヘラナデ整形されるが輪積成形痕が残る。この他覆土から土師器の糸切り底を有し内面黒色処理された坏形土器及びヘラケズリされた甕形土器体部片があり、須恵器蓋・甕形土器が若干出土している。

5　第22号住居址（第86・87図、第37・45図版）

遺構　調査地南西隅に位置する。第23・33号住居址及び溝址25を切る不整方形の住居址である。西半分は調査区域外にかかり、正確な規模は不明であるが南東壁の長さは3.16ｍを測る。壁高は僅かで4～6cmにすぎない。床面は平坦で軟弱である。調査ではカマド・柱穴等の施設はなかった。

遺物　出土量は少ないが、床面直上から出土したものである。図示できるものは須恵器坏形土器3点にすぎない。成形は水引き技法によってなされ、1はロクロ目が顕著に残り、体部が直線的に外開し、底径が小さくなる。これにたいし、2・3は体部が直線的であるが1よりも外開度が少なく、短いし、底径が大きく皿形をなす。尚、3には高台が付される。これらは共に糸切り痕を底部に残す。この他器種として内面黒色を呈する土師器坏・体部にヘラケズリが施される甕形土器及び須恵器蓋・甕形土器片が出土している。また土製品として土錘が1点出した。

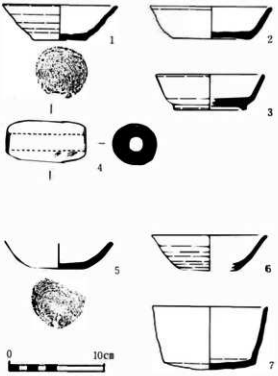


第86図　第22・23・33号住居址、土坑56実測図

6　第23号住居址（第86・87図、第37図版）

遺構　溝址25を切り、第22号住居址に切られるがその時期差は僅かであると思われる。大半が区域外にあるため規模は定かにできないが、南東壁の長さは1.78mにすぎず、極めて小規模なものと想定される。壁高は南東壁で5cmを測る。床面は中央に向って若干凹み、西端で8cmになる。柱穴その他施設はなかった。

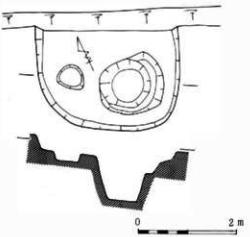
遺物　出土量は少なく、床面直上のものである。出土器種に土師器の内面黒色処理された坏・ロクロ整形痕及びヘラケズリ痕を残す甕形土器があり、須恵器では図示した坏形土器の他、蓋・甕形土器があるが、そのほとんどが破片である。須恵器坏形土器は水引き技法により成形され、5には糸切り痕を底部に残す。7は器形の深いコップ状のもので、底部は右回りのヘラケズリが施され丸味を有する。



第87図　第22(1～4)・23(5～7)号住居址出土土器

7　第24号住居址（第88～91図、第38・45図版）

遺構　調査地北端、第20・27号住居址の北側東寄りに位置する。北半分は区域外にかかるが、隅丸方形プランを呈すると思われる。南北軸は不明であるが、東西軸は長さ2.90ｍを測る。掘り込みは深く、東・西・南壁の壁高は各々29・26・18㎝で立ち上がりは直に近い。床面は平坦であるが、東側に傾く。南西隅には50×56㎝・深さ18㎝の柱穴と思われる落ち込みがあるが、対となる南東隅には口径1.32ｍ・底径0.64ｍ・深さ86㎝の中段を有す井戸状のピットがあり不明である。この井戸様のピットは覆土が住居址のものと同質であり、また貼り床はされておらず、出土遺物も該期のものの破片に限られていたので、住居址の付属施設と考えている。



第88図　第24号住居址実測図

遺物　住居址規模の割には出土量が多く、それも床面に近い覆土からである。

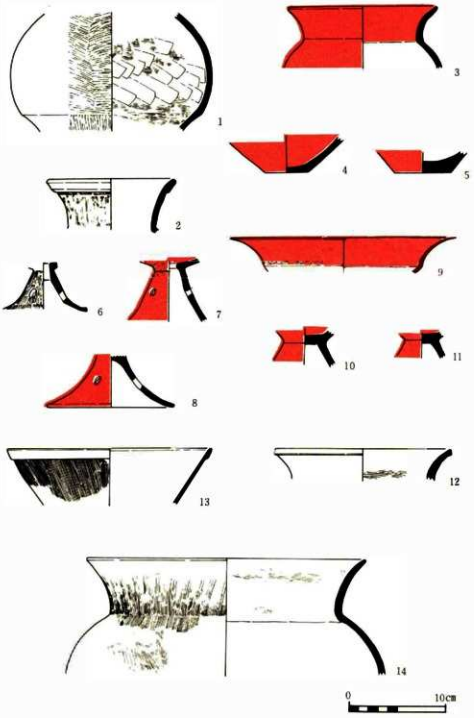
壺形土器（第89図１・３・５）１のように口縁部・底部は欠損して不明であるが、体部上半が球形になり、下半が稜をなしてこける器形になる。整形は外面がヘラミガキされるのにたいし、内面は刷毛ナデのちヘラにより調整される。３は頸部が立ち上がり、そこから口縁部が外反し、端部で短く立ち上がるという器形になり甕形土器を想定させるが外面及び内面の口縁部が赤色塗彩されることから貯蔵形態の土器とみている。５は小形のものの底部付近片で外面は赤色塗彩される。

坩形土器（２・13）口縁部が折り返し口縁になり、２は外反し、13は内弯気味の直線になる。折り返し部下には細かい刷毛ナデが施され、箱清水式期にない新しい要素をもつ土器である。体部が欠損しているものは残念である。焼成は非常に良い。

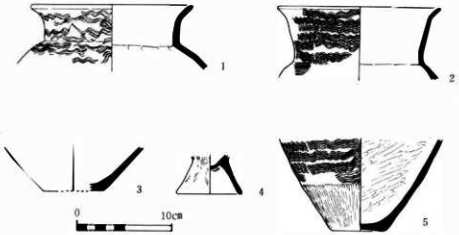
器台形土器（６～８）ともに脚部のみの破片で、体部から袖部にかけ大きく外開する器形になると思われ、中央付近に３円孔がうがたれる。また６・７は坏底部から脚部にかけ円孔があけられる。整形はともに外面がタテヘラミガキされ、７・８は赤色塗彩される。

高坏（９～11）出土量は少ない。９は坏体部上半の破片で、口縁部と境に鈍い稜をなし、そこから口縁部は弓なり状に外反する。10・11は脚部上半の破片で坏部との接着面の径が大きくなり、上端が平坦に仕上げるところに特色がある。脚部内面を除く他は全面赤色塗彩が施される。

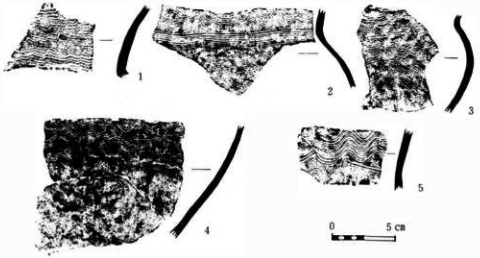
甕形土器（第89図12・14、第90図１～５、第91図１～５）出土量は多い。12・14は細かい刷毛整形痕を残すだけの無文の土器である。12は口縁部片で、他のものより短く外反し、端部はていねいに面取りされる。14は頸部でわずかに立ち上がり、口縁部は外反し、肩部は球形を呈



第89図　第24号住居址出土土器（1）



第90図　第24号住居址出土土器（2）



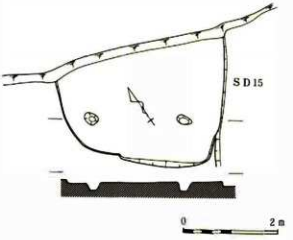
第91図　第24号住居址出土土器拓影

する。1・2の器形も14と似るが、頸部の立ち上がりは直に近く長くなり、口縁部が短く外反する。体部下半は5にみられるように底部に直線的に集約する。文様は右上がりの櫛描波状文が口縁部から体部下半まで施され、第91図2の拓影にみられるように頸部に丸味を有するものには一帯の羽状文が加飾される。整形は刷毛ナデを基調とするが、5の文様帯下はヘラミガキになる。4は台付甕形土器の台部で、甕底部が丸くなる様相がわかる。尚、第90図1・2の外面にはススが付着し、5の内面には炭化物が残存している。また胎土が精選されるもの、黄雲母の混入しているものが多い。

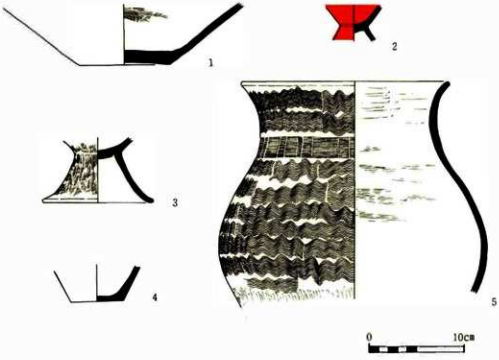
8　第25号住居址（第92～94図、第38・46図版）

遺構　調査地北東端に位置し、北側半分は区域外にかかる。溝址15・17によって切られ、東・西壁が削られる。正確な規模は不明ながら東西軸約 3.7m を測る隅丸方形プランを呈すると思われる。切り合い状態にない南壁では壁高が1cmを測り、傾きを持って立ち上がる。若干北側へ傾く平坦な床面には2個の柱穴が検出された。相方とも長径30cm・深さ18cm前後の楕円形で、南壁より約80cm、内側で柱穴間1.94m を測る。

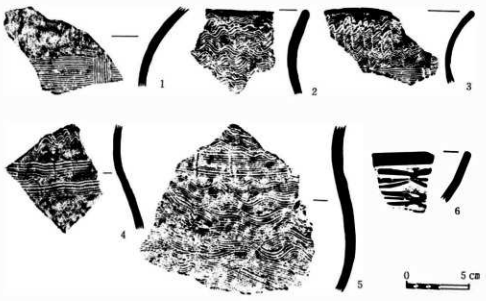
遺物　出土遺物は少なく、すべて覆土からの出土である。



第92図　第25号住居址、溝址15実測図



第93図　第25号住居址出土土器



第94図　第25号住居址出土土器拓影

壺形土器（第93図１、第94図１）全器形は知り得ないが、頸部は９本歯の櫛描T字状文で飾られ、底部は上げ底になり、そこから体部は直線で外開する。この２点の破片は赤色塗彩が施されていない。

高坏形土器（第93図２）小形のもので脚部内面を除く他は赤色塗彩される。あるいは器台形土器かもしれない。

甕形土器（第93図３～５、第94図２～５）この器種には大小ありまた台付甕形土器がある。器形は頸部が孤状になり、口縁部が素直に外反し、体部が球形でこの部に最大径がある点等特色がある。文様は頸部下の左回転の櫛描簾状文を中心に口縁部及び体部下半まで右上がりの波状文になる。基本整形は刷毛ナデとヘラミガキである。台付甕形土器（３）は台部のみの検出で、裾部が外反するラッパ状の器形になる。刷毛整形が顕著である。

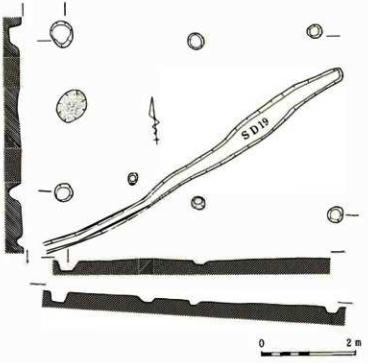
この他これらの土器に混じって、浮線網状文の文様をもつ縄文時代晩期の資料(6)を1点得た。第１～３次に亘る調査で唯一の遺物である。

9　第26号住居址（第95・96図、第39図版）

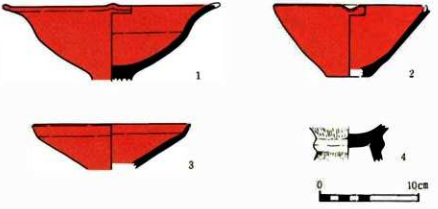
遺構　調査地の北側住居址群のひとつで、第27・31号住居址より新しく、溝址19に切られる。柱穴の配列と炉の位置によって認められた住居址で、プラン及び掘り込みの規模は不明である。しかし６本の柱穴のあり方から主軸、短軸はそれぞれ７ｍ・５ｍを越える隅丸長方形を呈するものであったと思われる。主軸方向はＮ－85°－Ｗとほぼ東西方向を指す。柱穴の規模は径30cm前後で、深さは四隅のものについてみると南西隅が13cmと若干浅いが他の３個は20cmを越える。

それに対し、残る中間の２個は８cm・10cmと浅く、径も幾分小さい。配列状況は主軸方向２間×短軸方向１間で、西側炉辺の間隔3.30m に比べ60cm程長い、不整長方形である。炉は西側柱穴間の中央やや内側寄りに位置し、径60cm・深さ５cmの舟底状の凹みに焼土が残存していた。炉の西辺から高坏の坏部が床面に密着して出土した。床面は平坦で軟弱である。

遺物　出土量は少なく、確かなものは高坏形土器１点にすぎない。体部と口縁部の境は鈍い稜をなし、口縁部は孤状に外反し、端部に相対する４個の突起を有する。内外面ともていねいに研磨され、赤色塗彩が施される。



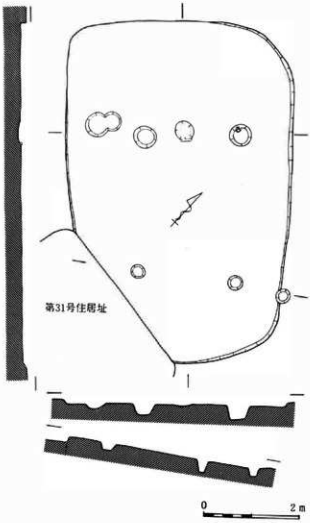
第95図　第26号住居址、溝址19実測図



第96図　第26(１)・27(２～４)号住居址出土土器

10　第27号住居址（第96・97図、第39・46図版）

遺構　調査地の北側住居址群のひとつで、第26・31号住居址及び溝址19より古い。このため南東隅一部を破壊される。プランは隅丸長方形で、主軸7.26m・短軸4.68m を測り、主軸方向N－43°－Wを指す。壁は直に近く、東・西・南・北の壁高はそれぞれ7・9・4.5・15cmとばらつきがあるが、北壁高が本来のものに近いと思われる。柱穴は4個確認された。プランと調和的な方形配列を呈する。規模は南側の2個がやや小さく、北壁添いのものは径50cm・南壁添いのものが径30cmである。深さは18～30cmを測る。柱穴間の長さは主軸方向3.05m・短軸方向2.00mの間隔をとる。北側柱穴間には長さ30cmの方柱状河原石を縁石として南側に配する地床炉が存在する。炉辺からその北側にかけて炭化物の散布が著しかった。床面は平坦で軟弱であるが、炉址付近は堅緻である。

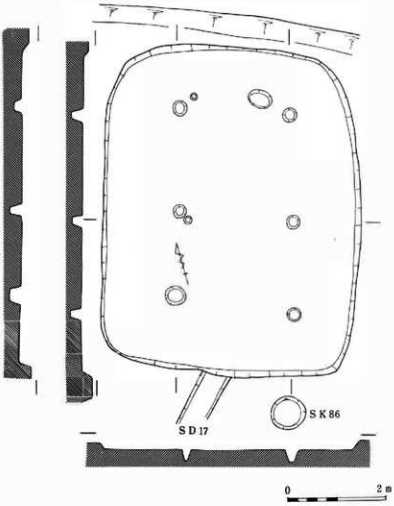


第97図　第27号住居址実測図

遺物　出土量は少ないが、床面に密着するものが多く、南西柱穴辺に集中する。また北東柱穴内より台付甕形土器の台部を得た。図示できるものは、体部が内弯気味に立ち上がり片口がつくり出される浅鉢形土器、口縁部が短く立ち上がる高坏形土器の坏部及び底部と台部の接着ヶ所が隆帯になる台付甕形土器片の3点にすぎない。浅鉢・高坏形土器には内外面とも赤色塗彩が施される。

11　第28号住居址（第98～100図、第40・46図版）

遺構　上部遺構に第26号住居址・溝址17・19がある。規模は主軸6.72m・短軸5.24mで、主

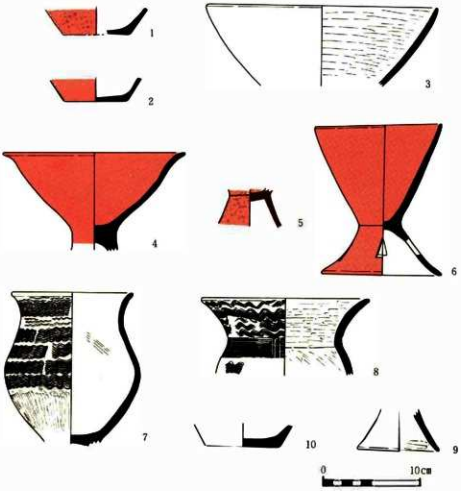


第98図　第28号住居址、土壙86実測図

軸方向をN－18°－Eにとる隅丸長方形プランである。規模の点では本調査で確認された住居址中最も大きい部類である。壁はやや傾きを持つが直に近いもので、壁高は東・西・南・北で各々20・14・24・13cmを測る。床面は平坦で、1間×2間の長方形配列を呈する6個の主柱穴を持つ。北西の2個の主柱穴の傍には、ひと回り小さな補助支柱穴と思われるピットがあり、主柱穴様の規則的配列を示さないが北壁際に長軸50cm・深さ27cmの楕円形のピットが1個存在する。主柱穴の規模はほぼ径30cmで深さ16～25cm、支柱穴は径15cm・深さ13～20cmである。1間の長さは主軸方向で1.74～2.18m、短軸方向で2.22～2.40mを測る。

遺物　遺物の出土量は比較的多いのであるが、図示できるものは少ない。すべて覆土からの出土である。

壺形土器（第99図1・2、第100図1）図示できるものは外面が赤色を呈する小形のものに



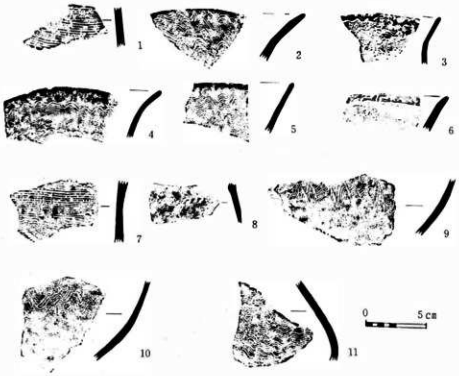
第99図　第28号住居址出土土器

すぎなく、第 100図1は肩部破片の拓影で櫛描平行線文がめぐらされ、縦方向の円形刺突文で飾られる他は不明である。

浅鉢形土器（3）体部が内弯的に外開し、口縁端がやや立ち上がる器形になる。整形はヘラミガキを基調とするが、外面の器面はあれ、さだかでない。

高坏形土器（4～6）4は坏部のみで、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反するラッパ状の器形になる。5は脚部の破片である。6は特異の形態で、坏部が断面三角形状を呈し、脚部は低く大きく外開する台付グラス形の器形になる。また脚部には4個の三角形透しがあけられる。これらは脚部内面を除き他は研磨され赤色塗彩が施される。

甕形土器（第99図7～9、第 100図2～11）第99図7・9は台付甕形土器である。7は頸部が孤状になり、そこから口縁部・体部が素直に外開し、体部中位付近が球形になり最大径があ



第100図　第28号住居址出土土器拓影

る。施文は８本歯の櫛状工具によってなされており、その範囲は口縁部から体部最大径下まで波状文が帯状になってめぐる。８は体部以下を欠損する。頚部が緩いくの字形を呈して屈開し、そのまま口縁部が外反し、肩部に丸味を有する。10は底部片で平底になる。第 100図２～６は口縁部片、７は頚部片、８は肩部片、11は体部上半及び９・10は体部下半の破片である。文様は図示した８及び７の拓影の土器に頚部の籠状文をみる他は口縁部から体部下半まで右上がりの波状になる。ただ８の拓影のものには列点文が認められる。整形は刷毛整形を基調とするが、文様帯のない体部下半及び内面はヘラによりミガキ様ナデで仕上げられる。

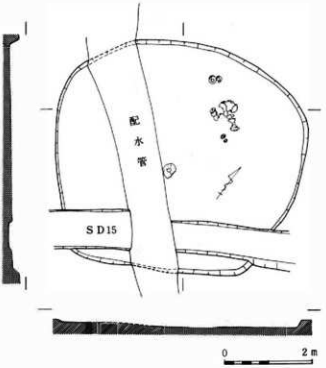
12　第29号住居址（第78図）

遺構　第28号住居址南側、土坑82の東側に存在する焼土の層を炉址と想定し、住居址名を付したが、その後の精査にも拘らず住居址としての施設を確認するには至らなかった。第28号住居址に近接し、床面レベルの差が32cmあって第11号住居址検出面レベルと同一であることから、これより新しい遺構である。焼土の形態は卵形を呈し、長軸28cm・短軸20cmの規模で、深さ５cmの舟底状になる。柱穴はなかった。

遺物　この遺構に直接関連するものは確認できなかった。

13　第30号住居址（第 101・102 図、第40・47・48図版）

遺構　調査地中央部に位置する。溝址15・16・20によって切られ、上部を配水管が溝址12・13と交差するように通る。プランは隅丸不整方形とも言うべき形態を呈する。規模は、長軸5.68m・短軸5.30mを測り、長軸方向はN－56°－Eを指す。壁高値は東・西・南・北壁において各々16・15・16・20cmになりやや傾きを持って立ち上がる壁である。床面は若干北に傾くが平坦である。柱穴・炉址はなかった。



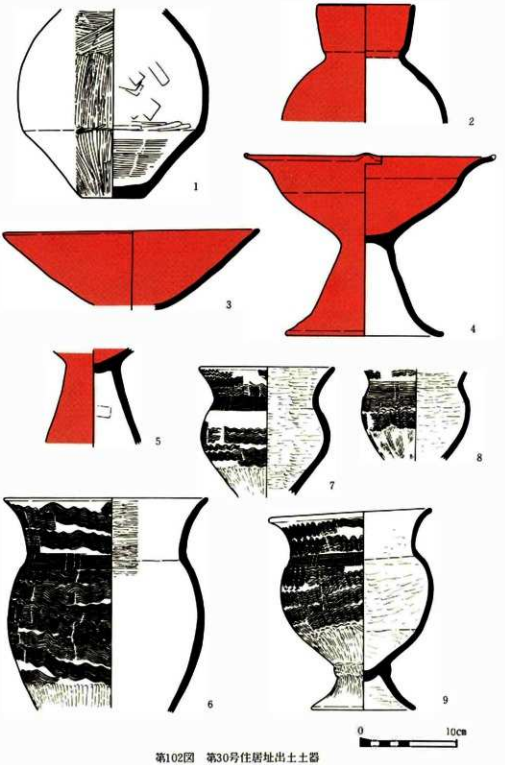
第101図　第30号住居址実測図

遺物　完形品及びそれに近いものが多い。それも北東隅付近に床面から覆土にかけ集中して出土したものである。この他からの出土は少ない。

壺形土器（1）頸部上は欠損する。体部は肩がはり、球形胴になり、下半が鈍い稜を残し、こけて直線的に底部に集約される。底部平底である。文様及び赤色塗彩は施されない。整形はヘラによりなされ、外面がていねいなミガキ、内面はナデになる。

坩形土器（2）これもまたこの時期では珍しい器形で、頸部がくの字形に屈開したのち鈍い稜をなし口縁部が直立的に立ち上がり、肩部から体部は球形になる。体部下半が欠損しているのは残念である。外面はヘラミガキが、内面が同工具によるナデ整形が施され、外面及び口縁部内面は赤色塗彩される。

高坏形土器（3～5）3個体出土しており、3は住居址中央東よりの覆土から単独で出土したもので、坏部は直線的に外開し浅鉢になる。4は完形に近いもので、直線的に外開する頸部から口縁部が短かく立ち上がった後大きく外反し、端部に4個の突起を有する。脚部はラッパ状に外開し、裾部は更に外開する。5は脚部上半の破片で、4より筒形になる。これらは脚部内面を除き他は赤色塗彩が施される。

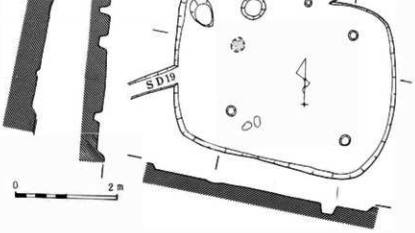


第102図　第30号住居址出土土器

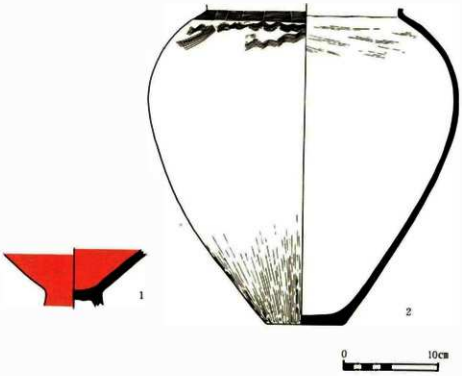
甕形土器（6～9）大・小の器種があり、小形のもの（7～9）は高台付になるものと思われる。6は頚部が短く立ち上がり、内に鈍い稜を構成し、口縁部は長く外開するがその角度は大きくない。肩部に丸味があり体部中央に素直に接続し、そのまま底部に集約される器形になる。7は頚部が孤状で、そのまま素直に口縁部・肩部を構成する。体部中央は扁平な球形になり、下半は直線的になる。8は口縁部・体部下半が欠損する。頚部はくの字形になり、体部は球形を呈する。9は外開する低い高台が付され、体部との接着部は隆帯様になるところに特色があり、口縁部が外反し、肩が張り、球形胴で、底部が丸味を有する尖底状の器形になる。これらの土器の文様は頚部の左回りの簾状文とそれを口縁部から体部最大径下まで右上がりの波状文になる。施文の順序は7～9が口縁部波状文・頚部簾状文・体部波状文にたいし、6は口縁部・体部波状文を施したのち、頚部簾状文で飾る。文様帯下の整形は刷毛で、体部下半及び内面はヘラによる。

14　第31号住居址（第 103・104 図、第41図版）

遺構　調査地北側住居址群のひとつで、第27号住居址より新しく、第26号住居址より古い。また溝址19により北・西の壁の一部が破壊されている。プランは東壁がやや張る隅丸長方形で、主軸方向はN－80°－Wを計る。壁高15cm前後で若干傾く。底面は全体に平坦であるが、東壁付近で中央部がやや盛り上がる。ピットは6個数えられるが、主柱穴は4個であろう。北東・南東・南西隅の直径は20cm前後でほぼ同一であるが北西隅のものは直径50cm・深さ30cmと規模に差



第103図　第31号住居址実測図



第104図　第31号住居址出土土器

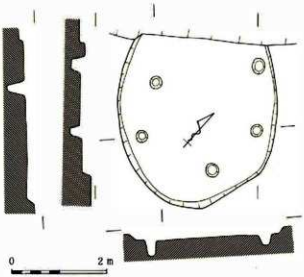
がある。北西隅に長径60cmの貯蔵穴であろうか。西側柱穴間やや北よりに径30cm程の舟底状を呈する地床炉があり、周辺に炭化物が散在していた。

遺物　出土量は少なく、すべて覆土中より破片で出土したが、図示できるものは後述の２点にすぎない。内外面とも赤色塗彩された高坏形土器の坏部下半の破片と、頸部上を欠くが、肩・体部上半が球形で丸味を有し、体部下半が直線的になり、平底の底部に至るいわば茶壺形になる甕形土器である。後者の文様は頸部付近に限られ、櫛状文及び２帯の波状文がめぐらされるのみであり、整形は外面にはタテヘラミガキが、内面が刷毛・ヘラナデ・ミガキが施される。

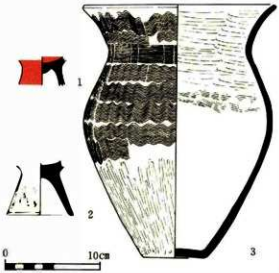
15　第32号住居址（第 105～107 図、第41・48図版）

遺構　調査地北東隅に位置し、３つの土壙墓の直下に当たる。住居址北側一部を溝址15・16によって切られるが、残存部より不整楕円形を呈すると思われる。長軸方向は不明であるが、短軸方向3.36ｍを測る。壁高は東・西・南壁で13・20・12cmで、立ち上がりは直に近い。柱穴は５個確認されたが、本来は６本柱であったと推定される。規模はほぼ径25cmで深さは23～38cmを測る。床面は平坦で軟弱である。炉は定かでないが西側中央付近にうすい焼土の散布が認められた。

遺物　出土量は少なく、すべて覆土からの出土である。器種は図示した高坏・甕形土器の他、赤色塗彩された壺形土器がある。高坏形土器は坏・脚部の接着付近の破片で全形を知り得ない。坏部外内面及び脚部外面は赤色塗彩される。甕形土器には破片が多く第106 図3のみ半完形品で、頸部が孤状に外開し、そのまま口縁部が外反し、肩部も素直に外開して体部中央が丸くなり、下半は直線的に上げ底の底部に集約する器形になる。文様は頸部の左回りの簾状文を中心に口縁部・体部最大径下まで波状文になる。第107 図に示した拓影の文様構成もこれに似るが、1の口縁部中位に櫛描平行沈線文がめぐり、4は頸部に接続しない2帯の簾状文が施される。整形は文様帯下は刷毛ナデ整形痕が残り、それ以外の外面はタテヘラミガキが、内面は同手法及び整形ナデが施される。第106 図2は台付甕形土器の台部片で、端部は面取りされる。



第105図　第32号住居址実測図

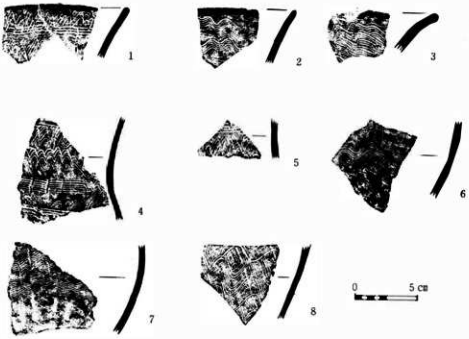


第106図　第32号住居址出土土器

16　第33号住居址（第86図、第37図版）

遺構　調査地南西隅住居址群のひとつである。大半は区域外にかかり、第22号住居址に切られるため、プラン・主軸方向・規模は不明である。わずかに北壁高7㎝を知りうるにすぎない。コーナーの形態から住居址を想定するが、伴なうであろう施設を確認するには至らなかった。

遺物　出土遺物はなかった。



第107図　第32号住居址出土土器拓影

17　第34号住居址（第111図）

遺構　調査地南端、溝址22の南側に位置する住居址であるが、その大半が調査区域外にかかるためプラン・主軸方向は不明である。わずかに北壁の長さ4.50m を知りうるにすぎない。

遺物　出土遺物はなかった。　（竹内稔・矢口忠良）

第3節　土坑墓及び土坑

1　土坑墓（第 108・109 図、第42図版）

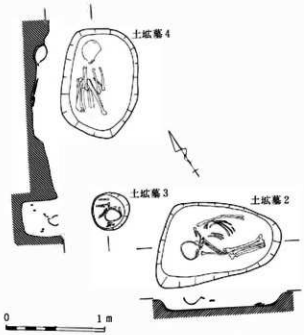
遺構　調査地北東隅付近から検出されたもので、南側のものより２～４と番号を付す。これらは地表下 1.2m 付近にあり、調査では掘り込み面は確認できなかったが、その出土状況からそれ程深い墓坑とは思われないし、また直葬と思料される。

土坑墓２は頭部付近の掘込みが広い隅丸三角形の、主軸方向をN－55°－Wにとるプランで、その規模は頭部のある西側で0.82m、南側で1.28m、北側で1.20m測る。確認面から底面まで14cmの深さである。人骨は頭部が西にあり、顔面を南に向ける横臥屈葬の状態で確認された。

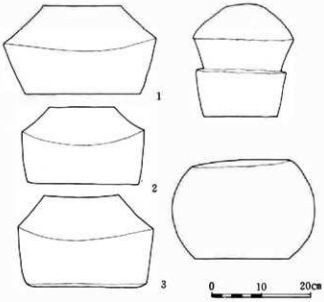
土坑墓３は２の西側、４の南側に隣接して掘り込まれている。プランは円形を呈し、その規模は径37cm・深さ40cmを測る。人骨は幼児骨で、顔面を北側に向け、座位屈葬の形態で検出された。

土坑墓3は主軸をN－45°－E方向にとり、規模が長軸1.1m・短軸1.54mの楕円形を呈する墓坑で、その深さは検出面から14cmである。人骨は北に頭部を向け、顔面を東に向ける横臥屈都で確認された。

遺物　これらの土坑墓内からの出土遺物はなかったが、土坑墓2の東側調査地外から整地の際、遺構確認面より約30cm程浮いて、五輪塔の空・風輪1個、火輪3個、水輪1個が出土した。火輪は各稜ともそり返り、水輪は扁平楕円形になる特色がある。　（竹内稔）



第108図　土坑墓2～4実測図



第109図　土坑墓周辺出土五輪塔

2　出土人骨について

出土した人骨は成人2体、幼児1体である。頭位はそれぞれ異なるが、成人骨は上、下肢を強く屈曲して、右側を向く横臥屈都位である。いずれも保存状態はよいが、脊柱や肋骨、寛骨等は脆弱で細片化した部分が多い。

本稿では幼児骨を中心に、東側人骨を第2号、西側人骨を第4号と呼称する。以下、各人骨の形質について記載する。

頭蓋骨〈第２号〉　骨質は堅緻で表面は滑沢である。脳頭蓋はブレグマーイニオン間を欠くが、ほぼ残存する。顔面部は眼窩下縁より下部、頭蓋底のすべてを欠く。頭蓋冠の骨壁はやゝ薄い。冠状縫合は細かく複雑で、内面のみが消失している。矢状・人字縫合ともに離開する。前頭縫合は認められない。眉間・眉弓は弱度に発達するが、前頭部の膨隆は弱い。側頭線も顕著でない。鼻根部の陥凹は浅く、頬骨の外側への突出も弱い。眼窩上縁は鈍で、前頭切痕は左右とも孔状となる。乳様突起は下方へ向き短小である。下顎骨はほぼ完形を保つ。骨体、下顎枝とも大型であるが、細く華奢である。下顎枝示数は中等度を示す。頤隆起・結節の発達は強くない。頤孔は大きく後方に開口し、両側ともP2−M1間にある。下顎棘は明瞭で２点の棘状となる。顎舌骨筋線は弱く、同神経溝も浅い。二腹筋窩、翼突筋粗面ともに平滑で、下顎切痕は深い。下顎隆起はみられない。

上・下顎とも歯列はよく整っており、鋏状咬合をなす。

残存歯の歯式は次のとおりである。

	$\dot{M}2$	$\dot{M}1$	P2	P1	C	I	I	I	I	C	P1	P2	$\dot{M}1$	$\dot{M}2$	×
M3	$\dot{M}2$	$\dot{M}1$	×	P2	C	I	I	I	I	C	P1	P2	$\dot{M}1$	$\dot{M}2$	

×印　欠失歯
●印　齲蝕歯

下顎前歯切縁に軽度の咬耗が残り、特に犬歯の尖頭は鈍円状となる。臼歯全体にMartinの２度程度の咬耗がみられる。また大臼歯のすべての近・遠心隣接面に強い齲蝕があり、その歯槽縁には病的歯周嚢により生じたものとされる骨吸収の痕がみられる。

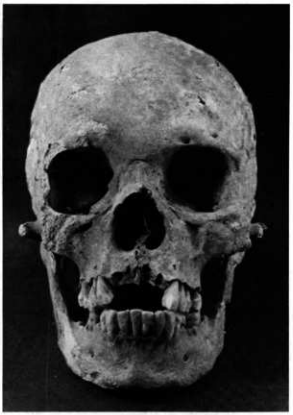
〈第４号〉左右頬骨弓、大後頭孔周縁、脳頭蓋の小部分を欠失するが、下顎骨（各突起の一部を欠く）を含めてほぼ完形である。

上面観は類卵円形で、長幅示数から示頭に属する。ただしこれは最大幅が 137mmとほぼ通例の値に対し、最大長が 193mmの長径を示す所以である。冠状、矢状縫合とも簡単な形状で、わずかな癒着の傾向をみせ、人字縫合の両端、後頭乳突縫合にかけて離開する。頭頂孔は左側に存在するが、右側は破損部にはいる。

側面観では前頭部の膨隆は中等度、やゝ後下方に突出した外後頭結節（結節はBrocaのⅡ型）に至るまで、頭頂の輪郭は一様である。坦平面の粗面の発達は強い。乳様突起は左側のみで、下方に向い長大である。

前面観の眉間、眉上弓の発達は顕著で、頬骨の突出も強い。鼻背側面角は62で小きく、やゝ高い穹隆をみせ、鼻示数から低鼻あるいは広鼻形にはいる。眼窩形は鈍円四角形で、左右対象、中眼窩である。梨状孔は鈍円、前鼻棘をほとんど欠き、下縁の形成弱く、歯槽部前面への移行は平面状からやゝ陥凹する。上顎歯槽型は短顎、口蓋示数は広口蓋を示す。歯弓の形はU字型で、口蓋突起は平滑、同隆起はみられない。Kollmannの顔面示数からは長顔で、同上顔面示数は短上顎に属する。

下顎骨は両側下顎小頭と左下顎角を欠くが、他は完形である。骨体は厚く頑丈で、後方へ向



第6表

第4号頭蓋骨主要計測値及び示数

1	頭蓋最大長	193 mm
2	グラベラーイニオン長	186
8	頭蓋最大幅	137
9	最小前頭幅	100
10	最大前頭幅	116
11	両耳幅	129
12	最大後頭幅	113
20	耳プレグマ高	109
23	水平周	547
24	横弧長	312
8：1	頭蓋長幅示数	70．98
20：1	頭蓋長耳高示数	56．48
43	上顔幅	110
44	両眼窩幅	106
48	上顔面高	66
69	オトガイ高	33
69－1	下顎体高	33
69－3	下顎体厚	15
75	鼻骨側面角	62

って低くなる。下顎切痕は残された形状から浅い。頤結節は強く発達し、骨体下縁とともに肥厚する。前歯部の歯槽隆起は平坦。頤孔は両側ともP_2－M_1間で、後上方へ開口する。頤孔は上部2個、下部1個の稜状。舌下腺窩、顎下腺窩ともに浅い。顎舌骨筋線は強いが、咬筋、翼突筋粗面とも弱い。

上顎前歯が欠損するので、咬合型は明瞭でないが、下顎前歯は唇側へ強く突出し、下顎前突の傾向を窺わせる。

残存歯の歯式は次のとおりである。

M3 M2 M1 P2 P1 C × ×	× × C P1 P2 M1 M2 M3
M3 M2 M1 P2 P1 C I I	I I C P1 P2 M1 M2 M3

×印　欠失歯

上・下顎の犬歯は尖頭が消失し、切歯の切端も咬耗痕があり、全体的にはMartinの2度に相当する。歯石の沈着はわずかに認められるが、齲蝕はまったくみられない。大臼歯の歯冠が著しく大きな計測値を示すようであるが詳細な検討は別稿にゆずる。

上腕骨〈第1号〉両側でも頭部より骨頭を欠失する。中等度の大きさで、骨幹の弯曲はみら

れず伸直である。捻転も強くなく、筋附着部の粗糙性も弱い。橈骨神経溝は浅く、肘頭窩は楕円型、骨体横断示数はR＝76：00、L＝79.17である。

〈第3号〉左右とも骨体中央部が残るのみである。太く頑丈な形で、外弯性が強く、大小結節も強く発達する。三角筋粗面も粗く、橈骨神経溝はやゝ明瞭である。骨体横断示数はR＝69.23 、L＝79.17 。

橈骨〈第1号〉左茎状突起を欠くが、他は両側ともに完形である。骨体は細く、上下端も小さい。頭体の屈曲は弱く、弯曲は小、扁平性も著明でない。骨間稜の発達は中等度で、掌面は弱い凹面をつくる。橈骨結節は弱い。右手根関節面の前縁に平行して強い堤状の骨稜が形成されている。最大長R L＝233mm、骨体横経R L＝18mm、同矢状経R L＝13mm、同断面示数R L＝72.22 、下端幅R＝36mm。

〈第3号〉右は近位端を、左は両端を欠く。第1号に比べて骨幹の形態に大差はないが、やや頑丈で、骨間縁が強度に発達している。橈骨結節も大きい。骨端も大きく強い粗糙性をみせ、手根関節面で内外側を二分する明瞭な一稜がつくられている。骨体断面示数R L＝72.22 。

尺骨〈第1号〉細く華奢な形である。弯曲は軽度で、断面三角形に近い。骨間縁は弱度。肘頭は尖形で烏喙突起は鋭い。尺骨粗面は深く陥凹し、溝底は粗糙である。全長R L＝247 mm、骨体横径R＝16mm、L＝14mm、断面示数R＝87.50 、L＝92.85 。

〈第3号〉右側完形、左側上下端を欠く。骨間稜が強く発達し、回外筋稜等も顕著である。脊側縁は鈍で掌側面は凹面、尺骨粗面も強く発達する。烏喙突起は大きく鋭い。全長R＝247 mm、骨体横径R＝19mm、L＝18mm、同矢状径R＝15mm、L＝14mm、断面示数R＝78.95 、L＝77.78 。

大腿骨〈第1号〉右側は骨頭部から近位端を欠き、左側は両端と骨体上部を欠く。骨体の弯曲は弱く、粗面の程度も強くない。大腿

骨稜は中等度の発達で、骨体は遠位骨端へ緩く移行し、関節端は大きくない。上部骨体断面は広型（R＝84.85）で扁平性はみられないが、中央部では中等（RL＝110.71）でわずかにPilasterの形成が認められる。

〈第3号〉左骨頭は残るが他の両端はすべて欠失する。骨体は短かく太い頑丈な形を有する。弯曲はや・強い。各筋附着部は強い粗糙性を具え、特に臀筋粗面は結節状の稜を形成する。大腿骨稜も高く隆起し、脛側唇は下部に至るも強い一稜をなす。骨体上部断面は超広（R＝73.53、L＝72.22）で強い扁平性を現わすが、中央部は中等（R＝113.79、L＝93.75）である。最大長R＝415mm。

脛骨〈第1号〉帯状粗面が軽く、左側で脛側顆を欠くが、右側は完形である。太さに比して骨体が短かい。弯曲、捻転も少ない。脛骨粗面の発達は弱いが、膝窩筋線は結節状に発達し、特に右側は膨隆した骨稜となり、強大な下腿筋の存在を推測させる。前稜は鈍でほぼ伸直、骨間縁は鋭い。中央骨体横断面形は外側面や・凹弯するも、後側の一稜のため不整菱形をなす。栄養孔部における脛示数から正脛に分類される。最大長R＝333mm、（以下Rのみ）上端幅73mm、粗面部矢状径42mm、同横径40mm、下端幅47mm、同矢状径33mm、中央部骨体断面示数R＝81.25、L＝83.87、同栄養孔部R＝77.14、L＝78.79。

〈第3号〉両側ともに近位関節端を欠くが、ほぼ完形である。短かいが頑丈な骨体である。各縁とも鈍で後稜の形成も微弱であるが、脛側面が強く溝状に陥凹するので、前稜は直状ながら、太い骨稜となる。脛骨顆や脛骨切痕附近は強く粗糙となり、膝窩筋線は弱い。断面は二等辺三角形に近似する。第1号に比して周径等において大差ないが、骨端が大きい。下端幅R＝52mm、同矢状径41mm、中央部骨体断面示数R＝80.00、L＝74.19、同栄養孔部R＝76.47、L＝75.00。

腓骨〈第1号〉右側が小部分を欠くが、完形。前稜は極度に鋭く、骨間稜も強い。脛側・腓側両面が著しい凹面をつくるため、前稜は薄い骨壁として形成される。このため中央横断面はT字型となる。骨体はや・強く内弯する。

〈第3号〉骨体中央部を残すのみであり、仲直で、前稜の発達は強いが他は中等である。

幼児骨　各骨はブロック状に集積した状態で、それぞれが遊離している。骨の保存はよく、長骨は原型に近い。頭蓋骨も細片化した部分が多いが、脳頭蓋などは接合できる。下顎骨は骨体部が比較的のこり、歯式は次のとおりである。

	m	m	c	i	i	i	i	c	m	m		
M1	ⓜ	ⓜ	c	i	i	i	i	ⓒ	ⓜ	ⓜ	M1	○印　残存歯

残存歯はすべて乳歯で、すでに完成されているが、6歳前後を萌出期とする大1大臼歯が、すでに歯冠の形成は完了し、歯槽も開放された出齦直前の状況から、年齢は4・5歳を算える幼児骨であれう。

以上、略記した骨の形質から第2号人骨は熟年の女性と推定される。乳様突起は弱く、大坐

骨切痕も浅い女性人骨としては、長骨の各部が強く発達する点が特徴的である。第４号人骨は同じく熟年の男性骨であるが、歯の咬耗程度は第１号より進捗しや、年長であることを示す。身長は約 159cmを算える。その頭蓋骨は著しい長径で、逆に幅径は小さい長頭型であり、顔面示数は現代人に近い数値であるが、幅径に比して小さな上顔面高は、すずまりな顔付を想起させる。歯列弓はＶ字型に近い下顎前突で、各臼歯は強大である。また第２号が相当度の齲蝕歯を有するのに比して、第４号は殆んど罹患されていないのは興味深い。各長骨の長さは第２号と大きな相違はないが、その骨格は強固で、筋附着部や諸関節面は大きく、矮小ではあるが頑丈な体軀を有したものと見なされる。

なお、第２・３号人骨ともに縁嘴などにみられる骨の変形は認められなかった。

○

本稿は出土人骨の概観について記載したに止まり、時代差を含めた他の人骨資料との諸種の比較検討は、別の機会に譲りたい。

資料を提供された長野市教育委員会、骨や歯の観察について聖マリアンナ歯科大学第二解剖学教室・森本岩太郎教授、信州大学医学部第二解剖学教室・田中実氏に多大の御援助、御教示を得た。深謝申し上げる次第である。

（西沢寿晃）

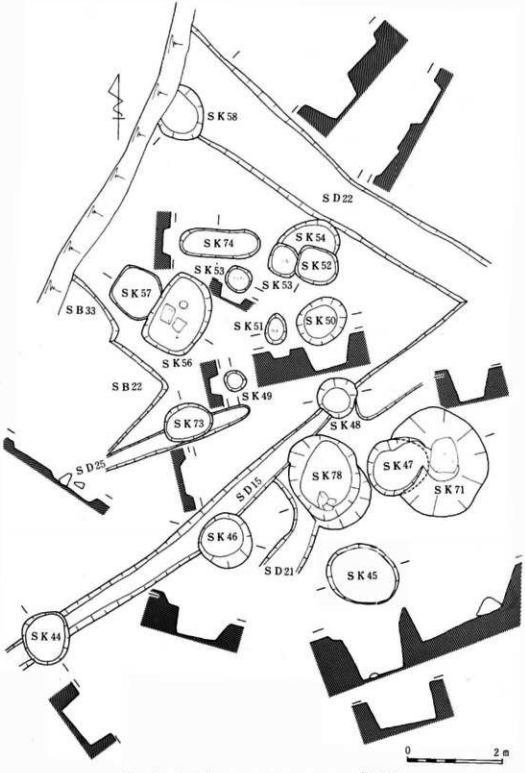
３　土坑（第84・86・98・ 110～113 図、第42・44・50図版）

この遺構は調査地南半分に展開するものが多い。形態は円形・楕円形・方形に近いものから一様でなく、また規模においても柱穴様のものから、井戸様のものまで多種多様である。柱穴様あるいは掘り方様のものは柱列としての形態をとらない。それ故一括して土坑として取り扱う。これらは平安時代及び土坑墓群と同レベルから検出したもので、掘り込み面はそれらと同じであるが、そのほとんどの遺構の覆土は、住居址のものより黒味が強く黒褐色砂質土である。ただ68・69・83の内部は白褐色の粘土がつまっていた点注目される。

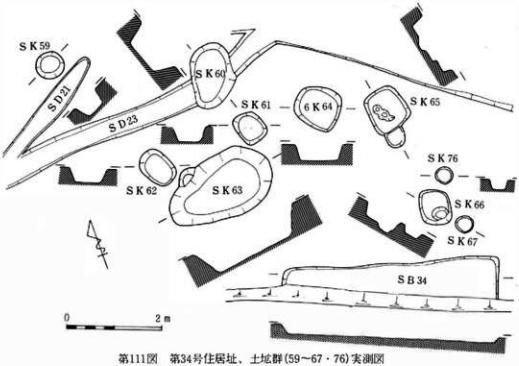
遺物でみるべきものはないが、土師器・須恵器・灰釉陶器等出土している。それも図示できない程の破片である。

第７表　土坑一覧表

番号	図番号	プ　ラ　ン	規模(東西×南北×深さ)	長軸方向	出土遺物等	備　考	重複遺構
44	110	円　形	径 1.1×53	―	土師器・坏 須恵器・坏	湧水	ＳＤ15・16
45	〃	楕円形	1.51×1.25×78	Ｎ－70°－Ｗ	〃　・　〃　・甕 〃　・　〃	〃	ＳＤ23
46	〃	円　形	径1.17×80	―		〃	ＳＤ16
47	〃	〃	〃1.20×85	―		〃	ＳＫ71
48	〃	〃	〃0.85×72	―		〃	ＳＤ15・16
49	〃	〃	〃0.45×21	―		柱穴？	
50	〃	不整円形	1.08×95×63	Ｎ－50°－Ｅ		湧水	
51	〃	楕円形	0.45×0.65×17	Ｎ－5°－Ｅ			

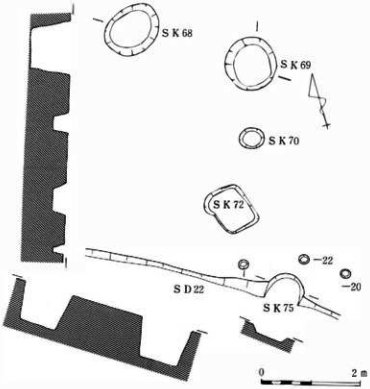


第110図　土坑群(44～54・56～58・71・73・74)実測図



第111図　第34号住居址、土坑群(59～67・76)実測図

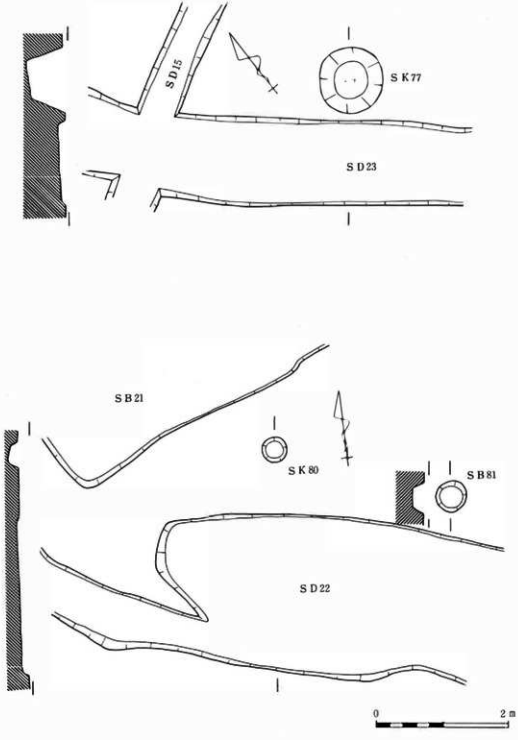
52	*	隅丸長方形	0.9×0.75×26	N－76°－W			SK53・54
53	110	円　形	径0.66×20	－	須恵器・坏・甕		SK52・54
54	*	楕円形	1.2×？×22	N－42°－E			SK52・53
55	77	円　形	径55×23	－			
56	110	不整長方形	1.17×1.65×17	N－26°－E	須恵器・坏・甕 炭化物・焦石		SK57
57	*	不整円形	径1.03×12	－			SK56
58	*	*	* 1.1×68	－	土師器・坏・甕・磨石 須恵器・坏・灰釉	湧水	SD22
59	111	円　形	* 0.59×33	－			
60	*	不整楕円形	0.95× 1.4×45	N－30°－E		湧水	SD23
61	*	不整方形	0.56× 0.7×43	南　　北		*	
62	*	楕円形	0.7×0.85×30	N－30°－W			
63	111	不整楕円形	2.35×1.36×62	N－80°－W	土師器・坏・甕 須恵器・坏・甕・灰釉	湧水	
64	*	不整方形	0.98× 0.9×33	N－47°－W			
65	*	*	0.85×0.91×30	N－10°－W			
66	*	*	0.65×0.75×26	N－17°－E	土師器・坏 須恵器・台付坏		
67	*	円　形	径0.37×14	－			
68	112	不整楕円形	1.28×0.93×75	N－68°－E	粘土	湧水	
69	*	円　形	径1.08×80	－		*	
70	*	*	* 0.45×30	－			



第112図　土坑群（68～70・72・75）実測図

71	110	〃	〃2.28×75	—	土師器・ﾊｹ・甕 須恵器・甕	湧水	SK47
72	112	不整方形	0.76×0.96×25	N－20°－W			
73	110	不整楕円形	1.05×0.77×13	N－76°－E			SD25
74	〃	〃	1.71×0.6×16	東　西			
75	112	円　形	径0.75×12				SD22
76	111	〃	〃0.39×20				
77	113	〃	〃0.95×56			湧水	
78	77	不整楕円形	1.5×2.07×11!	N－35°－E	礫	〃，南に段	SD15・16・24
79	77	円　形	径0.37×18	—		柱穴？	
80	113	〃	〃0.47×16	—		〃	
81	〃	〃	〃0.85×56	—			SB21・SD19
82	84	不整方形	1.25×1.04×19	N－45°－E			
83	77	円　形	径1.14×65		粘土	SB18の南・湧水	
84	〃	不整円形	〃0.76×32				SD19
85	〃	〃	〃0.80×36			SB30の北	SD18
86	〃	円　形	〃0.78×53				SB29

（直井雅尚）



第113図　土坑77・80・81、溝址15・23・20実測図

第4節　溝址（第77・92・95・ 113～115 図、第43・44図版）

今回の調査で11ヶ所の溝址を確認したが、調査所見で溝としての用途が考えられるのは、溝址15・16・20・22・24で他は用途不明の溝状遺構である。覆土は土坑に似て黒褐色砂質土層であるが、溝址15のみ黄褐色の砂で埋っていた。時期について定かでないが、遺構から溝址15・16にみるとおり、弥生時代のものより新しく、土坑群より古いものと考えられ溝址19では第21号住居址より新しい。

遺構　溝址15・16・24は調査地北東端から南西端にかけ検出した直線的な3本の溝址で、溝址16に沿うように新たに溝址12が掘り込まれ、溝址24は南西隅で、溝址16と溝址24は合流するあり方を示す。途中で第25・32・30号住居址及び溝址22を切り、土坑40・42・44・75に切られる。土坑墓4も溝址16の上部に掘り込まれた遺構である。溝址15・16は区域内全長42mに及び、溝址15の溝巾48～90cm、溝址15・16を合わせると1～1.8mの規模を持つ走溝方向N－60°－Eを指す。溝床は全般に平坦で壁は直に近い。ちなみに溝址16より溝址15の方が古く、溝15の底面レベルは南端と北端近くの差が約12cmあり、溝流路の方向は後背湿地から微高地に向かっている。溝址16・24もこれ程差は確認できないが同方向の流路と思われる。

溝址17　調査地北東端、第25・28号住居址の一部を削り、溝址15・16の北側2.60mの位置を、調査区域外から溝址15・16及び19に沿って延びる溝址である。溝巾50～84cm、長さ9.60mをもって終息する。溝底は中間部で高低はあるが、ゆるやかに北東端から南西へ傾く。その差は7cmである。

溝址18　調査地中央部、第13号住居址北側に位置し、溝址15・16と19の間を同方向へ延びる短い溝址である。東端は土坑86に切られ、東端は配水管の下に消える。長さ約2m・巾50～70cmを測る。

溝址19　調査地北側住居址群の上部から溝址15・16に沿って南西に走り、第21号住居址の一部を切りつつ調査地域外に延びる溝址である。中央付近で分流し、土坑85で終る。調査地内の長さ24m・巾60～96cmを測る。所々に段を有するが全般に平坦な溝底のU字溝で、流路を微高地から後背湿地にとる。

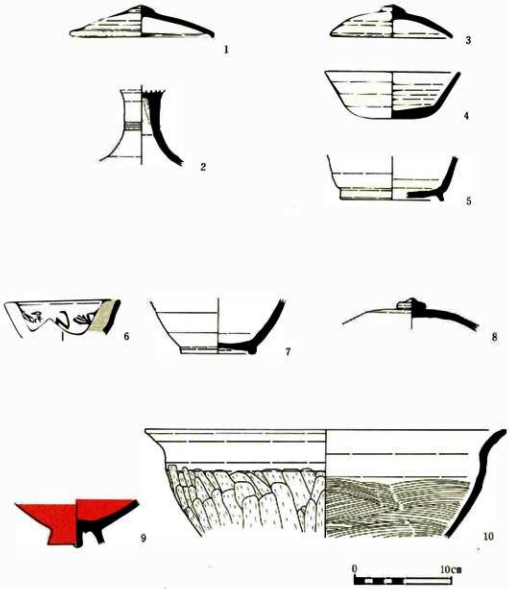
溝址20　調査地中央部から西側区域外にかけて延びており、長軸8.96m・短軸2.30m・深さ10cm程の浅い土坑状掘り込みに端を発する溝址である。溝の方向はN－74°－Wを指す。溝底は凸凹が顕著である。

溝址21～23　溝址22は調査地南東端から北西方向に延びる溝址で両端は調査区域外にかかる。第34号住居址北側で分かれ溝址23となる。溝址26との溝底の差が若干ある。溝址22は溝址15・16及び土坑54・58・75に、溝址23は土坑45・60によって切られる。溝址21～23の規模はそれぞれ長さ2.80・10.0・23.8m、巾40・50・120cmで、溝址22の流路方向はN－57°－Wを指す。

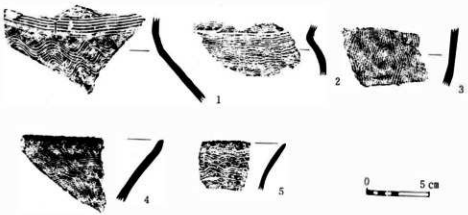
溝址25　調査地南西端に位置し、溝址15と第22号住居址の間にある。調査では第22・23号住

居址に切られるため、その北側の一部を検出したにすぎない。巾40cmで、流路の方向はN－7°－Eである。

遺物　遺構のもつ性格であろう、弥生時代から平安時代に比定される土器片が出土しているが、図化できるものは第114 図に示したもののみである。特記できるものは、溝址１出土の蓋形土器の完形品と、溝址３出土の坏形土器体部外面に３字の墨書である。



第114図　溝址15(１・２)・16(３～５)・17(６～８)・18(９)・20(10)出土土器



第115図　溝址15(1～3)・18(4・5)出土土器拓影

第8表　溝址出土遺物

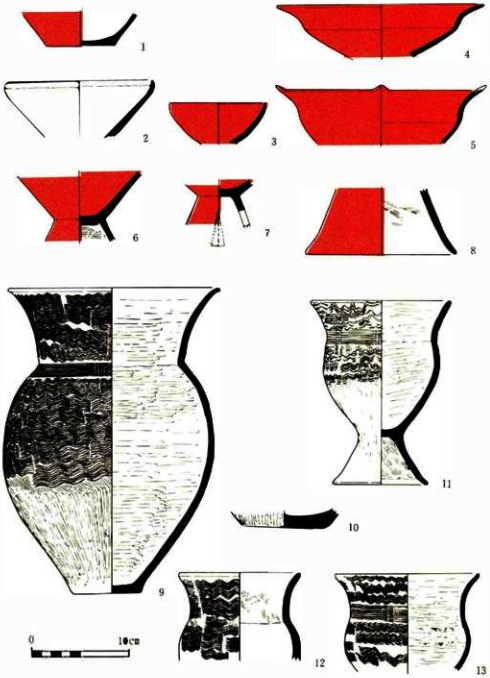
溝番号	図番号	器種			その他
		弥生式土器	土師器	須恵器	
15	第114 図1・2	赤色塗彩土器	坏・甕	蓋・高坏	灰釉陶器
16	〃　3～5	〃・甕	〃・〃	〃・坏・甕	
17	〃　6～8	壺・高坏・甕・器台	〃・〃	〃・〃・〃・長頸壺	
18	〃　9	〃・〃・〃	〃・〃	〃・〃	
19	第115 図1・2	〃・〃・〃	〃・〃		
20	第114 図10	〃・〃・〃	〃・〃・鉢?	〃・〃・〃	
21	第115 図4・5	〃・〃・〃	〃・〃	〃・〃・〃	
22		赤色塗彩土器	〃・〃	〃・〃	
23		〃	〃	〃・〃	
24		〃	〃・〃	〃・〃	
25		〃	〃・〃		

(小林秀行)

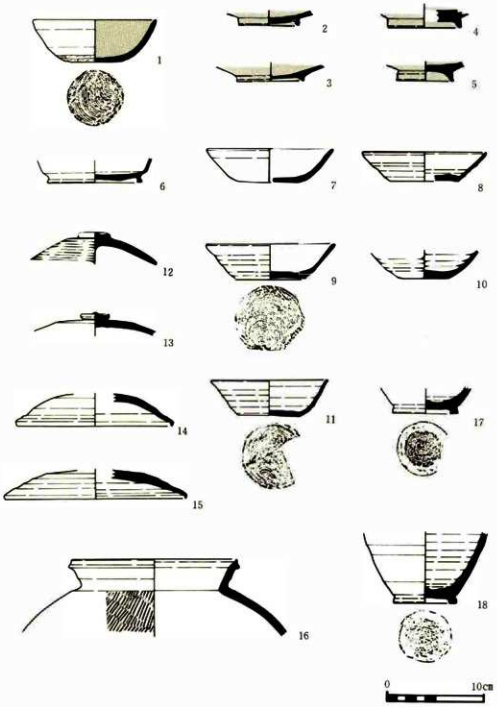
第5節　包含層出土の遺物

遺構に伴もなわない出土土器を取り上げる。土器量はそれ程多くないが、多種類ある。

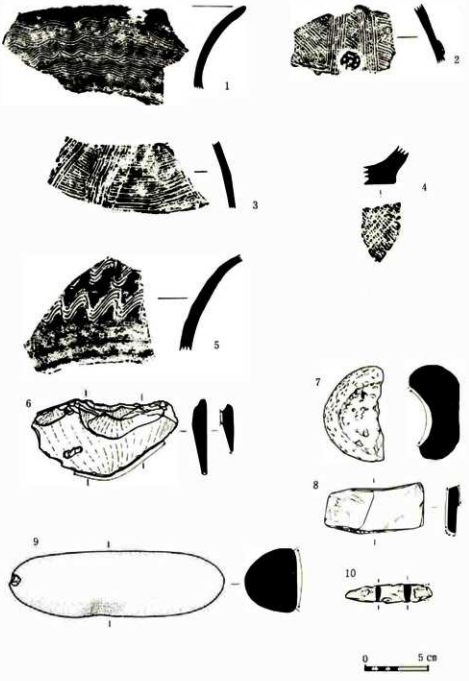
弥生式土器（第116 図・118 図1～4）これらは主として北側住居址群の第26住居址及び第20号住居址付近から採集したもので、このうち、いくつかは第26・27号住居址に付属するものと考えられる。壺形土器には図示できるものがない程の破片が多く、そのほとんどの外面に赤色塗彩が施こされる。頸部及び肩部には赤色塗彩がなく、第118 図2・3にみられるように文



第116図　包含層出土土器（1）



第117図　包含層出土土器（2）



第118図　包含層出土土器拓影及び石器・鉄器

様帯を構成する。2には相対するような櫛描斜行条線上を垂下する2帯平行条線が施こされ、縦帯の条線間を刺突文を有するボタン状貼付文で加飾し、3にはT字状文が施こされる。第116 図3は体部内外面とも赤色塗彩される浅鉢形土器で、2・4～8は高坏形土器である。2は口縁部が短かく内屈する浅鉢形坏部で、内外ともヘラミガキされるが、赤色塗彩が施こされない。4・5も坏部で、器形は口縁部下方が体部から立ち上がった後上方で外反するものであるが、5の端部には4個の小突起が施こされる。6～8は脚部片で、7には三角窓が4個うがたれる。これらは脚部内面を除き赤色塗彩される。3は内外面とも研磨され赤色塗彩が施こされる器台形土器の坏部である。他は甕形土器であるが、12・13は11と同様高台が付されるものと思われる。9は口縁部が頸部から立ち上がり気味に外反し、肩部から体部にかけ丸く球形を呈し、下半は直線的に平底の底部に集約される器形になる。文様は肩部の簾状文を中心に口縁部・体部中央付近まで櫛描波状文になる。11～13は頸部が立ち上がり、そこから口縁部が外開し、肩部も前者と比べると丸味を減じ底部に至る器形で、11には外開する高台が付される。尚13の口縁端部は短かく立ち上がる。文様は立ち上がった頸部に簾状文が施こされ他は体部中位まで波状文がめぐらされる。ただ12には簾状文が施こされない。整形の基本は刷毛ナデが用いられ、次で体部外面下半はタテヘラ、内面はヨコヘラにより調整される。第118図4の拓影は底部裏面に残る布目圧痕である。

平安時代（第117 図、第118 図5）出土地点は調査地全面に認められるが、量的には第22・23号住居址付近から出土したものが多い。第117 図1～5は土師器坏形土器である。1は楕形で底部に糸切り痕を残す。2～5は土拡52付近から出土したもので、低い断面三角形の高台が付され、全面黒色処理される点特色を有する。第117 図の他は須恵器である。6～11は坏形土器で、ロクロ水引き成形によりロクロ目を顕著に残す。底部に糸切り痕を残す。6には低い高台が付される。12～15は蓋形土器で扁平な擬宝珠形のつまみが付され、天井部が丸味があり、口縁部は短かく屈曲し嘴状になる器形である。17・18は水引き技法の成形による壺形土器の底部付近の破片で、低い高台が付され、内面に糸切り痕を残す。16及び第118図5は甕形土器で、16の外面には叩き目が残り、5の口縁部は櫛描波文で飾られる。

石器（第118 図6～9）6は裏面上端にプラットホームを残す剥片を利用した石器で先端の矢印の部位のみ磨かれ、鋭利な刃部になる。7は火山弾製の石臼で、8は砥石である。9は長楕円の河原石を用い、先端が敲打器、本体の平坦面を利用して磨石としている。

鉄器（第118 図10）刀子が1点のみ出土している。先端部及び径部を欠いており、全体を知り得ないが、径部に木質が残存している。（石上周蔵）

第9表　出土図示土器一覧表

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出
	第18号住居址（第79図）										
1	坏		13.2		椀形	外面 ロクロ成形 内面 〃 ・黒色処理	小石・雲母	良	灰褐色	黒色	覆
2	〃		12.3		〃	〃 〃 ・ 〃	〃・〃・雲母	〃	茶褐色	〃	
3	〃		12.6		〃	〃 〃 ・ 〃	〃・〃	〃	灰褐色	〃	
4	〃	5.2	14.4		坏形・体部直線的	〃 ・糸切り 〃	〃・雲母	〃	黒褐色	黒褐色	
5			11.1		小形・体部張り気味・口縁部外開	〃 〃	〃・〃	〃	〃	赤褐色	
6	〃		24.5		大形・ 〃 ・ 〃	ロクロ成形（上半）・ヘラケズリ 〃 （〃）	〃	〃	茶褐色	茶褐色	
7	〃		24.6		〃・ 〃 ・長胴形	〃 （〃）・ 〃 〃 （〃）	〃	〃	赤褐色	〃	
8	〃		24.4		〃 ・長胴形	〃 （〃）・ 〃 〃 （〃）	〃	〃	〃	〃	
9	〃		36.5		体部浅鉢形・肩部張る	〃 （〃）・ 〃 〃 （〃）	〃・小石	〃	〃	〃	
10	壺				四耳壺・体部丸味	〃・タタキメ・タタキ台使用	〃・〃(少)	〃	暗緑色	灰色	
11	甕		8.7		鉢部口縁部のみ・口縁端部立ち上がる	〃	〃	〃	黒色	黒灰色	
	第19号住居址（第81図）										
1	壺			16.7	天井部丸味・端部嘴状	外面 ロクロ成形 内面 〃	小石(少)	良	赤黒色	赤黒色	磨
2			22.4		口縁部外開・口縁端部更に外反	ロクロ成形・ヘラケズリ 〃	〃・砂粒	不良	赤褐色	灰褐色	
	第20号住居址（83図）										
1	坏	4.3	12.3		椀形・丸底気味	外面 ロクロ成形・底部ヘラケズリ 内面 〃 ・黒色処理	小石	良	黄褐色	黒色	磨
2	〃	4.1	13.2	6.1	〃	〃 ・糸切り 〃 ・ヘラミガキ・黒色処理	小砂粒	〃	茶褐色	〃	
3	〃	3.7	12.6	6.4	体部内弯気味・口縁端部外反	〃 ・ 〃 〃	砂粒	〃	灰白色	灰白色	
4	〃			6.7	底部のみ・高台外開	〃 ・ 〃 ・ 付高台 〃 ・内外面黒色処理	〃(少)	〃	黒色	黒色	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土状
5	壺?				脚部片のみ	外面タテヘラミガキ・黒色処理 内面	砂粒(少)	良	黒色	黒灰色	床
6	甕	(32.8)	24.7	4.0	長胴砲弾形・最大径口縁部	ロクロ成形・ヘラケズリ 〃	+・小石	+	茶褐色	茶褐色	カ

第21号住居址（第85図）

1	坏	3.9	13.1	6.5	体部直線的	外面ロクロ成形・底部ヘラケズリ 内面 〃	精選	良	青灰色	青灰色	床
2	〃	4.1	13.2	8.5	〃	〃 ・赤切り 〃	小石	+	〃	〃	
3	〃	3.8	12.1	6.4	椀形・口縁部わずかに外反	〃 ・ 〃 〃	精選	+	〃	〃	
4	形象埴輪?				段あり	刷毛整形 輪積み痕	砂粒・小石	+	赤褐色	黄褐色	

第22号住居址（第87図）

1	坏	3.7	12.0	5.6	坏形・体部直線的	外面ロクロ成形・赤切り 内面 〃	小石	不良	乳灰色	乳灰色	床
2	〃	3.4	12.8	8.1	底部比較的大	〃 ・ 〃 〃	精選	良	青灰色	青灰色	
3	〃	3.8	11.5	7.5	〃 ・高台外開	〃 ・ヘラケズリ・付高台 〃	〃	〃	暗灰色	〃	

第23号住居址（第87図）

4	坏			5.7	体部内弯気味	外面ロクロ成形・赤切り 内面 〃	砂粒(多)	不良	乳灰色	乳灰色	床
5	〃	3.8	12.3	6.0	体部直線的に外開	〃 ・ 〃 〃	+(+)	+	〃	〃	
6	〃	6.7	12.0		体部直線的に立ち上がる	〃 ・ヘラナデ 〃	〃	良	青灰色	青灰色	

第24号住居址（第89・90図）

1	壺				体部丸味・下手こける	外面ヘラミガキ 内面刷毛整形のちヘラナデ	精選	良	黄褐色	赤褐色	覆
2	甕		13.4		やや外反・折り返し口縁	ハケ整形のちミガキ・内面ヘラミガキ	〃	良	赤褐色	赤褐色	覆
3	壺?		15.5		短頸・口縁外反	外面口縁内赤色塗彩・ヘラミガキ	小・砂粒・雲母	+	赤色	黄褐色	
4	浅鉢			4.6	平底	内・外面赤色塗彩・ヘラミガキ	精選	+	〃	赤色	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土状
5	壺			4.9	平底	外面 赤色塗彩・ヘラミガキ	小砂粒・雲母	良	赤色	赤褐色	覆
6	器台				脚部に3孔・端部大きく外反	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ・ヨコナデ	雲母	〃	黄褐色	茶褐色	〃
7	〃				〃	外面 赤色塗彩・ヘラミガキ 内面 ナデ	精選	〃	赤色	赤褐色	〃
8	〃			13.2	脚部大きく外反・3孔	外面 赤色塗彩・ヘラミガキ 脚内、ヨコナデ	〃	〃	〃	〃	〃
9	高坏		23.5		坏部大きく外反・稜を有す	内・外面 赤色塗彩・ヘラミガキ	〃	〃	〃	赤色	〃
10	〃				外面・坏部内面赤色塗彩	外面 赤色塗彩・ヘラミガキ 脚内ナデ	〃	〃	〃	赤褐色	〃
11	〃				〃・〃	外面 赤色塗彩・ヘラミガキ 脚内ナデ	砂粒少	〃	〃	〃	〃
12	壺?		21.2		直に外開・折り返し口縁	外面 ハケ整形 内面 ヨコナデ・ナデ	精選	〃	赤褐色	〃	〃
13	甕?		18.3		口縁部外反・端部面取り	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ・ハケ整形	砂粒・雲母	〃	〃	〃	〃
14	甕		28.8		口縁部外反・くの字に屈曲し体部へ	外面 ハケ整形・ナデ 内面 ハケ整形のちヘラミガキ	〃	〃	黒褐色	黄褐色	〃
1	〃		17.3		口縁部口唇にて外反・屈曲し胴部へ	外面 ヨコナデ・ナデ・櫛描波状文 内面 ヨコナデ・指おさえ・ナデ	〃・雲母	〃	赤褐色	〃	〃
2	〃		17.2		口縁部、口唇にて外反・屈曲し胴部へ	外面 櫛描波状文・簾状文 内面 ヘラミガキ	〃・〃	〃	〃	赤褐色	〃
3	〃			6.4	平底	外面 ヘラミガキ 内面 ハケ整形	〃・砂粒・雲母	〃	〃	茶褐色	〃
4	台付壺			7.0	直に外開・端部面取り	外面 ハケ整形・のちヨコナデ 内面 ハケ整形・のちヨコナデ	精選	〃	灰褐色	赤褐色	〃
5	〃			5.7	上げ底	外面 櫛描波状文・ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	小石	〃	茶褐色	〃	〃

第25号住居址（第93図）

1	壺			9.6	上げ底	外面 ヘラミガキ 内面 ハケ整形	小石・砂粒・雲母	良	赤褐色	赤褐色	〃
2	高坏?					外面 赤色塗彩・坏ヘラミガキ 脚内 赤色塗彩・ヘラミガキ	精選	〃	赤色	赤色	〃
3	台付壺			11.7	台部は大きく外反	外面 ハケ整形 台内 ヨコナデ	砂粒	不良	赤褐色	黒褐色	〃
4	甕			5.6	平底	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	小石・砂粒・雲母	良	黒褐色	茶褐色	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土
5	壺		22.2		口縁部外反・ゆるやかな球形胴	外面 櫛描波状文・擬状文（15本） 内面 ヘラミガキ・ハケ整形	雲母・雲母	良	黄褐色	黄褐色	覆
	第26号住居址（第96図）										
1	高坏		20.5		坏部大きく外反・稜を有す	内外面 ヘラミガキ・赤色塗彩	精選	良	赤 色	赤 色	覆
	第27号住居址（第96図）										
2	浅鉢	7.3	15.4	4.4	体部内弯気味・片口	内外面 ヘラミガキ・赤色塗彩	砂粒・雲母	良	赤 色	赤 色	
3	高坏?		15.9		坏部直線的・口縁部やや立ち上がる	〃 〃 〃	〃・〃	〃	〃	〃	
4	台付壺				底部台部破片・段を有す	タテヘラミガキ・ナデ	〃	〃	茶褐色	茶褐色	
	第28号住居址（第99図）										
1	壺			6.9	平底・器肉薄い	外面 ヘラケズリ・赤色塗彩 内面 ヘラミガキ・底部ヘラミガキ	小石・雲母	良	赤 色	淡赤色	
2	〃			6.5	〃 〃 〃	ヘラケズリ・赤色塗彩 ヘラミガキ・底部ヘラミガキ	砂粒	〃	〃	茶褐色	
3	鉢		23.7		体部内弯気味	ヘラミガキ 荒れていて不明	〃（多）	不良	黄褐色	赤褐色	
4	高坏		18.9		〃 ・口縁部大きく外反	ヘラミガキ・赤色塗彩 〃 〃 〃	〃・小石	良	赤 色	赤 色	
5	〃				脚部のみ	〃 〃 〃 ヘラケズリ	〃（少）	〃	〃	淡赤色	
6	〃	15.9	12.9	12.1	坏部コップ状 脚部ラッパ状に外開・三角形のすかし4ヶ	坏部内外面脚部外面ヘラミガキ 赤色塗彩	精選	〃	〃	赤 色	
7	壺		12.4		胴部丸味・最大径胴部中位	櫛描波状文（8本） ヨコナデ・ヘラナデ	砂粒	〃	暗褐色	赤褐色	
8	壺		17.0		口縁部外反	外面 櫛描波状文・擬状文 内面 ヨコヘラミガキ	砂粒（少）	〃	茶褐色	茶褐色	
9	〃			8.3	台部のみ	ヘラナデ ヘラケズリ	小石・砂粒	〃	赤茶色	黒茶色	
10	〃			7.7	底部のみ・上げ底気味	ヘラミガキ・ヘラケズリ	〃・〃	〃	黒褐色	黒褐色	
	第30号住居址（第102図）										
1	壺			6.2	体部上中丸味・体部下半	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラナデ	小石・砂粒	良	黄褐色	黄褐色	床

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土状態
2	坩		9.9		鍔部くびれ口縁部立ち上がる	外面 ヘラミガキ・赤色塗彩 内面 ヨコナデ	砂粒	良	赤 色	赤 色	床
3	鉢?杯		26.2		体部底線的に外開	外面 櫛描波状文のちタテヘラナデ・赤色塗彩 内面 ハケのちヘラミガキ・赤色塗彩	砂質	＊	＊	＊	覆
4	〃	18.7	25.3	15.9	坏部中位で立ち上がり・口縁大きく外反 脚部ラッパ状に外反	坏部内外面 脚部外面ヘラミガキ・赤色塗彩	＊	＊	＊	＊	床
5	〃				坏底部脚部のみ	〃 〃	小石・砂粒	＊	＊	＊	〃
6	甕		20.7		鍔部立ち上がり口縁部外反	外面 櫛描波状文・擬状文・ヘラナデ 内面 ヘラミガキ・ヘラナデ	精選	＊	茶褐色	茶褐色	〃
7	〃		13.6		口縁部外反・胴部上半張り気味	外面 櫛描波状文・擬状文・ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	小砂粒(多)	不良	黄褐色	赤褐色	〃
8	〃				胴部丸味	＊ ＊ ＊ ・刷毛整形 ＊	小石・砂粒	良	茶褐色	＊	〃
9	〃	20.6	16.5	10.4	口縁部肥厚外反・胴部丸味 台付・台部と体部間に稜	＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	砂粒	＊	赤褐色	＊	覆

第31号住居址（第104図）

1	高坏				坏底部のみ	内外面 赤色塗彩	砂粒	不良	赤 色	赤 色	覆
2	甕			10.0	大形・茶壺形	外面 櫛描波状文・擬状文・ヘラミガキ 内面 刷毛整形・ヘラナデ・ヘラミガキ	砂粒(少)	良	黒褐色	赤褐色	＊

第32号住居址（第106図）

1	高坏				坏部・脚部破片	坏部内外面・脚部外面赤色塗彩	砂粒	良	赤 色	赤 色	覆
2	[illegible]			7.0	台付甕台部のみ	外面 刷毛整形 内面 ナデ	＊	不良	黄褐色	黄褐色	＊
3	〃	26.9	19.9	6.4	胴部やや張る・口縁部外反	外面 櫛描波状文・擬状文・タテヘラミガキ 内面 ヘラミガキ・ハケ整形	＊＊雲母	良	赤褐色	＊	＊

溝址15（第114図）

1	蓋	3.3		14.8	天井部丸味・握宝球つまみ	ロクロ成形・ヨコナデ・ヘラナデ	小石・砂粒	良	暗灰色	青灰色	覆
2	高坏				脚部のみ・ラッパ状に外開 2本の横走沈線	＊ ＊ ＊	砂粒	不良	灰白色	灰白色	＊

溝址16（第114図）

3	蓋	3.4		12.6	天井部丸味・宝珠つまみ・端部肥厚	ロクロ成形・ヨコナデ・ヘラナデ	砂粒	良	青灰色	青灰色	覆

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土状
4	坏	4.8	13.9		体部直線的に外開	ロクロ成形・ヨコナデ・ヘラ切り・付高台	砂粒	良	暗灰色	暗灰色	覆
5	〃			10.4	体部直線的・高台外開	〃 〃 〃 〃 〃	精選	〃	青灰色	暗灰色	〃
					溝址17（第114図）						
1	坏		11.2		椀形・口縁端部肥厚	ロクロ成形・内面黒色処理	砂粒	良	赤褐色	黒色	覆
2	壺			7.4	体部丸味・高台直立	〃 ・ヘラケズリ・付高台	小石(多)砂粒	〃	茶褐色	黒灰色	〃
3	蓋				天井部に棱・擬宝珠つまみ	〃 〃 〃	〃 〃	〃	青灰色	青灰色	〃
					溝址18（第114図）						
	高坏				坏底部のみ・ほぞ明瞭	外面 ヘラミガキ・赤色塗彩 内面 〃 〃 〃	砂粒(少)	良	赤色	赤色	覆
					溝址20（第114図）						
	壺		37.3		浅鉢形・口縁部外反	外面 ロクロ成形・ヘラケズリ 内面 〃 〃・刷毛整形	小石	良	黄褐色	黄褐色	覆
					包蔵址出土土器（第116・117図）						
1	壺			7.1	底部のみ	外面 ヘラミガキ・赤色塗彩 内面 荒れていて不明	小石(多)砂粒(多)	良	赤色	赤色	
2	高坏		15.1		体部直線的に外開・口縁部内弯	内外面 ヘラミガキ	小石粒雲母	〃	茶褐色	茶褐色	
3	器台		9.7		体部内弯気味に外開	内外面 ヘラミガキ・赤色塗彩・一部ハケメ	精選	良	赤色	赤色	
4	高坏		21.3		体部に棱・口縁部大きく外反	〃 〃 〃	小砂粒(少)雲母	〃	〃	〃	
5	〃		20.9		口縁に小突起4個	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	
6	〃				坏部直線的に外反	〃 〃 〃・ハケメ	精選	〃	〃	〃	
7	〃				脚部にスカシ孔4個	坏部内外面・脚部外面ヘラミガキ・赤色塗彩	小石	不良	〃	〃	
8	〃			15.4	脚部のみ	外面 ヘラミガキ・赤色塗彩 内面 刷毛整形・ナデ	砂粒	良	〃	茶褐色	
9	壺	31.7	21.6	7.0	体部に丸味・口縁部に若干の段 頸部立ち上がりゆるやかに外反	櫛描波状文・簾状文・ハケのちヘラミガキ ヨコヘラミガキ	精選	〃	赤褐色	黄褐色	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土状
10	甕			8.7	底部のみ・上げ底	タテヘラミガキ ナデ	砂粒	良	灰褐色	黄褐色	
11	〃	19.1	14.1	9.5	台付・最大径口縁部・ 頸部立ち上がり口縁部外開	櫛描波状文・横状文・タテヘラミガキ ヨコヘラミガキ・台部内面刷毛整形 〃	〃	〃	赤褐色	黒褐色	
12	〃		12.4		頸部内面に稜・口縁部外反・ 胸部に丸味	ヘラナデ 〃 〃 〃	〃(少)	〃	黒褐色	赤褐色	
13	〃		14.8		頸部立ち上がり外反・口縁部やや内弯・ 体部丸味	刷毛整形のちヘラミガキ	〃(〃)	〃	茶褐色	黄褐色	
1	坏	4.4	12.8	5.9	椀形	外面 ロクロ成形・糸切り・ヘラケズリ 内面 〃 ・ヘラミガキ・黒色処理	〃	不良	赤褐色	黒 色	
2	〃			6.1	皿形・高台三角形	〃 ・黒色処理・ヘラ切り 〃 〃 〃 ・付高台	〃(少)	良	黒 色	〃	
3	〃			6.7	〃 〃 〃	〃 〃 〃 ・糸切り 〃 〃 〃 ・付高台	〃・小石	〃	〃	〃	
4	〃			7.3	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃 ・ヘラ切り 〃 ・ 〃 ・付高台	〃・〃	〃	〃	〃	
5	〃			5.7	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃 ・糸切り 〃 ・ 〃 ・付高台	〃	〃	〃	〃	
6	〃			9.7	坏形・高台外開気味	〃 ・付高台・糸切り 〃	・・小石	〃	青灰色	青灰色	
7	〃	3.5	13.2	5.9	〃 ・上げ底気味	〃 ・糸切り 〃	小石	〃	灰白色	灰白色	
8	〃	3.0	12.8	6.8	〃 ・ 〃	〃 ・ 〃 〃	精選	〃	青灰色	青灰色	
9	〃	3.7	13.3	7.2	坏形・上げ底気味	外面 ロクロ成形・糸切り 内面 〃 〃	砂粒	〃	青灰色	青灰色	
10	〃			5.4	〃 ・ 〃	〃 〃 〃 〃	・・小石	〃	紫灰色	紫灰色	
11	〃				〃	〃 〃 〃 〃	小石	〃	青灰色	青灰色	
12	蓋				天井部丸味・つまみ扁平	〃 ・ヘラケズリ 〃	砂粒小石	〃	赤灰色	〃	
13	〃				〃 ・ 〃	〃 〃 〃 〃	〃	〃	灰白色	灰白色	
14	〃			16.1	〃 ・口縁端部嘴状	〃 〃 〃 〃	・・小石	〃	灰 色	灰 色	
15	〃			18.7	〃	〃 〃 〃 〃	〃・〃	〃	青灰色	青灰色	
16	甕		17.1		胴部丸味・口縁部くの字に外開	ロクロ成形・タタキ目 〃 ・ナデ	〃・〃	〃	灰白色	小豆色	

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出
		器高	口径	底径					外面	内面	状
17	壺			6.6	底部のみ・高台三角形	ロクロ成形・糸切り・付高台	砂粒・小石	良	青灰色	小豆色	
18	〃			6.4	〃 ・高台や〇外開	〃 〃 〃 〃	〃	〃	灰白色	灰白色	

第5章　結　語

昭和51年度の校舎改築、54年度のプール建設、同年の清野保育園新築等の公共事業により四ツ屋遺跡西側の一部を緊急発掘をせざるを得なかったことは第1章で述べたとおりである。また反面これらの調査によって、新たな貴重な資料を提示したことは、今後の研究上重要な示唆を与えるものと考えている。これを調査順に第1・2・3次調査と呼称し、その内包する問題を提示し結語とすることが、前記したことに触れ、また早期報告は調査の性格及び調査者の責任と考えているので充分な内容になっていない点、御容赦願いたい。

第1次調査で注目されるものに第9号住居址出土遺物と第12・13号住居址及び溝址13に代表される弥生時代の遺物群と遺構にある。

第9号住居址は典形的な隅丸方形を呈する住居址で、その形態変遷の方向は後述する第3次調査のものより、より正形に向かっていることがうかがえる。遺物の出土では、住居址覆土が二層に別れるようで、床面及びそれに近い覆土から所謂箱清水期に比定される土器片が多く出土した他、床面に密着して十占に使用されたと思われる焼付痕が確認できる鹿の肩甲骨と小径の銅鈴が2点出土している点注目される。占骨に供されたと思われる骨片は第12・13号住居址にも認められ、更埴市生仁遺跡のものと考え合わせると箱清水期未葉における祭祀形態の主流を占めていたことが推察され、金属器とのかかわりの中から箱清水期の文化内容を祭政の中からうかがえる資料と考えている。これらが出土した上層（上面）で、住居址南東隅及び壁外から刷毛整形を主とし、それも台付の甕形土器を主にする土器群が、正位に近い横倒れの状態で検出されている。この出土状態は下位のものと異なりそのほとんどが完形に近く、不思議なことに櫛描波状文を施文とする小形の台付甕は、台部までほぼ完形の形態で残存しているにたいし、刷毛及び箆状工具を用いた大形の甕形土器及び片口土器を含む器種には台部を欠損しているものが多い点実測図をみて気付くと思う。これは弥生期と異なる器種の増加とともに、箱清水期の伝統を受けつぎながら、壺形土器の形態変移等にその変遷の姿は激動的なあり方を示していると思われる。

次に溝址13・14のあり方である。遺構は自然堤防を縦に切り、確認地点より北に流路をとりその規模から条理的な遺構を考えられるが、その掘り方及び溝址12の遺物群を考慮すると、それも妥当でないように思う。自然堤防上における溝の意味するものは何であろうか。

次に上部土拡群と下部土拡群の問題をいかに理解するかの問題と、土拡墓と道島廃寺のかかわりである。上面土拡群の性格は土拡墓と同質土層内にあり、そのほとんどが伸展葬を基本とした墓址と考えている。反面、下面土拡群はその深い掘り方・規格性から屈葬の墓制にもとづいた遺構と想定している。ただこれらの上下面遺構内よりそれを積極的に裏付ける資料が認められなかった点残念である。土拡墓は第1次及び第3次調査で確認されており、第1次のＳＫ

1は伸展葬で胸部付近に刀子の副葬品を有する点、第3次調査で検出したあり方と相異している。即ち第1次のものをその検出遺構面の土層と他の土坑覆土と近似するところから平安時代末葉に比定されるものと考えている。

この他遺物としてロクロ成形痕を有する須恵器坏形土器体部に「松井」と刻字された土器片が出土しており、その時期は10世紀代後葉に求められ、この資料は英田（多）庄松井郷を証する確たる資料を認定している。尚この根拠に、戸隠神社蔵の「妙法蓮華経版木」末書に「英多庄松井住藤原正長　元享元年酉三月十八日」がある。これはまた道島廃寺の存在及び地域的占地を考察する上に、一つの重要な根幹的資料になり得るものと思う。

第2次調査では、建物址（攪乱層）を中心とする遺構・遺物が注目される。それは道島廃寺址の一建物址を想定するもので、礎石と考えられる扁平自然石が規格をもって一定間隔に据えられ、その上屋は八角堂宇を考えている。これはその後、調査所見から火災によって廃絶され、再建の痕跡は認められなかった。これに関与する遺構に土坑は第3章第6節に述べたとおりであるが、竪穴状遺構・井戸址を考えている。竪穴状遺構を住居址と想定したため、井戸址2の存在は全く注意しなく、床面追求の中で初めて確認されたように埋土土層が同質であったため、その前後関係は不明であり、積極的根拠がないので断定できないが、両者とも各々にたいし付属施設と考えても、無理のない結論としている。遺物では第76図・第34図版にみるとおりの墨書がこれらの遺構を中心に出土している。この傾向は本調査で顕著に認められるもので、前述の八角堂宇の性格を直接物語る資料と考え、厨厨又は書院と考えるのはどうであろうか。

この他特記遺物として、S字状口縁甕形土器片が2点出土しているが、遺構及び他の遺物との関係が不明であるのは残念である。一点は肩部の破片で、もう一点は口縁部から頸部にかけての破片で外面に赤色塗彩される坩（？）形土器で、器台形土器にも同様の手法が用いられている等箱清水文化圏の伝統と新たな文化を折衷した点、興味ある資料であるし、本地における古墳時代の動きの中で理解される問題であろう。

第3次調査では時期別の占地の問題と弥生時代住居址及び土坑墓及び土坑と溝址等の遺構を中心とする。

時期別占地をみるに、弥生時代住居址は第1・2次調査地より微高地に求めているのに対し、平安時代遺構は、第2次調査の竪穴状遺構を含めて住居形態遺構が調査地に散在しているが、本次の調査でより後背湿地に近い位置から散在的に認められ、その空間を埋めるように溝址・土坑がある。

弥生時代遺構は密集をなし、重複関係にあるものが多いのに対し、平安時代では22・23・33号住居址の重複をみる以外になく、これは第2次調査で検出された竪穴状遺構と近似した性格を有するものと考えている。

溝址は調査段階では全部が後背湿地へ流れ込むものと考えていたが、溝址1・2は底面レベルから後背湿地の水を抜くため、自然堤防を縦断する方向への流路を予想され、逆に溝址20・22は自然堤防を横断する位置にあり、後背湿地に向け西に流路をとっている。

これとの関係で、土坑群がある。そのほとんどが平面プランを円形となしている。中には柱穴状のピット及び第22号住居址を中心とした土坑群に底面が浅いものが多いのに対し、溝址にかかるもの及び空間を埋める土坑群は掘り込みが深く、湧水をみる。この湧水レベルは梅雨時の調査であったためか、水位が高いものであったが、後に後背湿地水面との比較をみるに0～2㎝のほぼ同レベルであった。2㎝の差を有するものに土坑44～48・50・58・60・61・68・69・71・77・78・80・83等があり、68・69・83はそれも内に粘土で充鎮されたものである。ちなみにこれらの遺構が分布する地域は鉄分を多量に含む溶脱層になっており、調査でもこの層に至ると軽装の器具をはねかえす程の堅さをもっていた。この上面土層を有する土坑は、直に近い深い掘り込みを有するものであるのが一般であるが、その性格を考えるに、円形プランで湧水をもつものは井戸的性格を、粘土を充鎮するものを土器用粘土据置場と考えている。

さて遺構・遺物の特記されるものをみるに、縄文時代晩期の浮線網状文様を有する土器片が1点出土している。この遺物は周辺の磨耗がそれほどなく、塩崎遺跡群と同様、ここの自然堤防上における始源的開発と考えている。弥生時代ではまず遺構である。8軒の住居址が検出されるが、重複関係にあるものが多かったため調査に困難を極めた。その形態は第32号住居址にみられるように円形に近いものがあり、第28号では相対6本柱の主柱穴を有しているが、炉の位置は明確にできなかった。また第30号住居址の隅丸方形を基本とするようであるが、これには柱穴・炉を確認することができなかった。他の住居址は隅の丸い長方形を呈するものでその規模は長軸6～7m前後の大形のもので、柱穴を4本（24？・25？・27・31号）・6本（26・28号）を基本とする。4本柱を有すると思われるものには、短軸の柱穴間中央付近に舟底状の地床炉をもつのにたいし、6本柱をもつ第28号住居址にはその痕跡が認められなかった点、注目している。編年上の各遺構出土遺物はこれからの遠くない将来解明されるものと期待しているが、第9号住居址と第30号住居址の完形品を主体とする出土のあり方が近似している点注目され、該期に遺物が多いが、完形品が少ないという問題を内包しているように思う。次の時代の古墳時代を表標する遺構・遺物は認められなく、また次代の奈良併行の遺物が認められるにもかかわらず、住居址等の生活遺構及びれに付随する確かな遺構は見い出すことができなかったが、平安時代遺構は散在的に認められる。完掘した第20・21号住居址はカマドの有る西壁を短かく、対　の東壁を長くする点第1次調査のものと共通性があり、初一中葉にかけこの他遺跡の関係において時期的住居形態のあり方を示しているものと考えられる。遺物では第1号住居址の四耳壺、と第21号住居址の形象埴輪片のあり方を考えるに、前者は墓址、後者を近辺古墳に関する遺物と推考される。中世においては、土坑墓があり、五輪塔の出土によりその時代は決するものの墓址のあり方は歴史時代事象とあいまってこれからの問題と考えている。

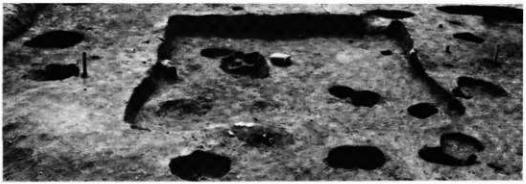
以上四ツ屋遺跡に係る第1～3次調査の結果を調査順に内包する問題を提示した。これらは同一地点内に包まれる遺構群であるにもかかわらず、総括結論はあえてさけ塩崎遺跡群（第3次調査報告一本稿所収）に述べたとおりであるので御容赦いただきたい。　　（矢口忠良）

四ツ屋遺跡遠望（西より）

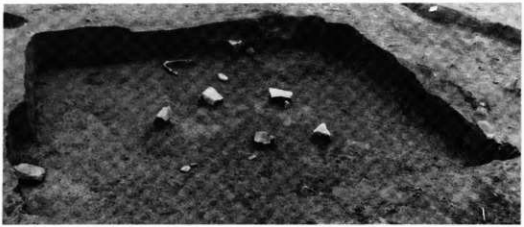
調査地遠望（南より）

（北より）

（南より）



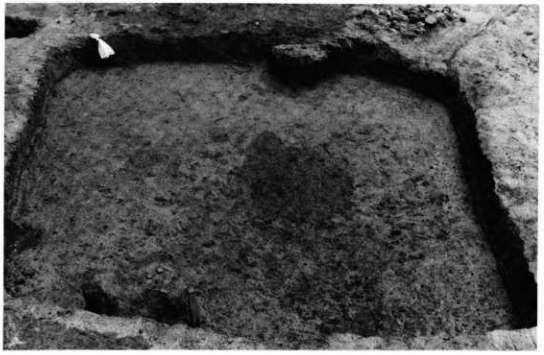
第1号住居址・柱穴群



第2号住居址

第3号住居址

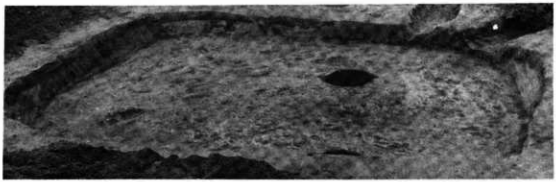
第四図版　第七・八号住居址



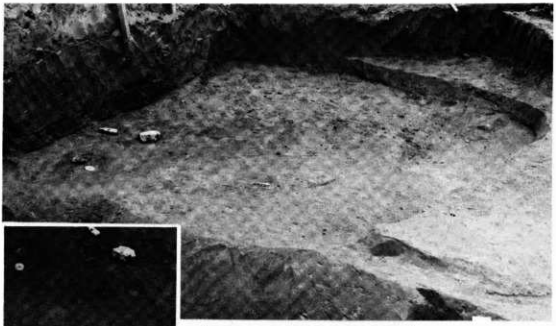
第7号住居址

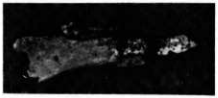
第8号住居址

第五図版　第九号住居址



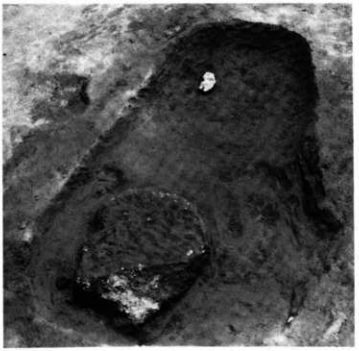
第10・11号住居址





第12・13号住居址

第七図版　小竪穴址一・土坑墓・上部土坑群

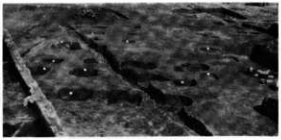


小竪穴址 1

土坑墓

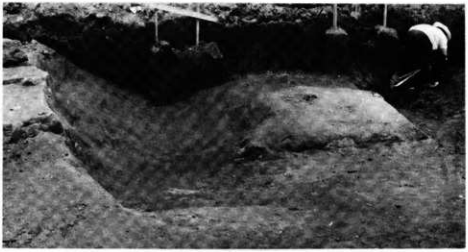
上部土坑群

上部土坑群（東より）



同（西より）

土坑18



溝址13・14

第九図版　第九号住居址出土土器（一）

第一〇図版　第九号住居址出土土器（二）

第一一図版　第九号住居址出土土器（三）・銅釧

第一二図版　第一二・一三号住居址出土土器・紡錘車

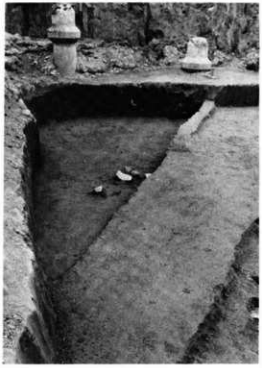
第一三図版　溝址一三出土土器

第一四図版　溝址一三・四・その他出土遺物

第一五図版　調査スナップ

第一六図版　調査スナップ

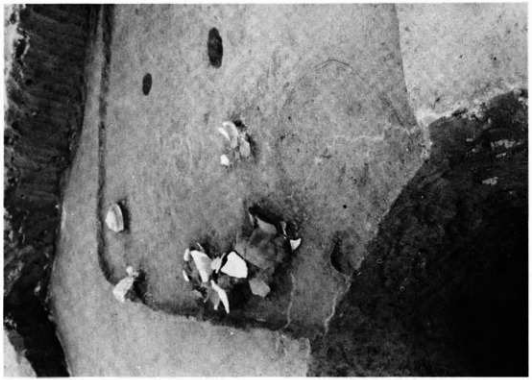
第一七図版　清野小学校プール調査地（西より）

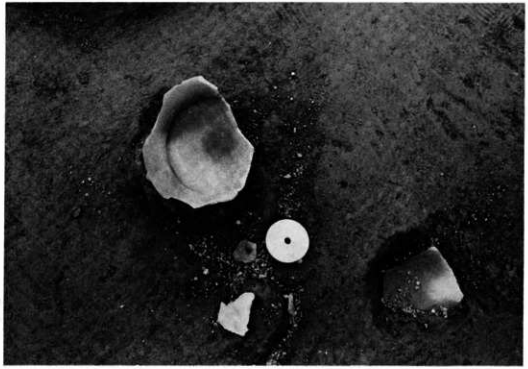


（上）第16号住居址
（下）第17号住居址

第16号住居址

第17号住居址



第一九図版　第一七号住居址遺物出土状態

第二〇図版　第一七号住居址遺物出土状態